



## 目次 | CONTENTS

新年のご挨拶……………	02	教室だより……………	08	学生課外活動報告……………	20
就任挨拶……………	03	支部だより……………	10	十全昔話……………	24
受賞……………	04	クラス会……………	15	学生コーナー……………	26
学会報告等……………	05	同窓生の消息……………	18	第12回金沢大学 ホームカミングデイ開催……………	27
病院紹介……………	06	金沢から世界へ発信……………	19		

# 新年のご挨拶



十全同窓会会長  
中村 信一

新年あけましておめでとうございます。

同窓会会員の皆さまには、お元気で新春をお迎えのことと、お慶び申し上げます。本年は母校創立157周年、同窓会発足87周年になります。年頭にあたり、母校金沢大学医学類・医学系ならびに十全同窓会の発展と、会員の皆さまのご健勝、ご活躍をお祈りいたします。

昨年は、本部ならびに各県支部の役員をはじめ会員の皆さまから暖かいご支援・ご協力を賜り、深く感謝いたしております。本年も、会則第2条「会員相互の親睦を計り、母校の発展を期することを目的とする」を胸に刻み、同窓会事業の着実な推進に努める所存でございます。会報は昨年9月に発行された170号から伝統的な縦書きから横書きに、またカラー印刷となりました。更には新たに広告掲載も取り入れました。会員の皆さま方からのご意見をいただきたく、よろしく願いいたします。各種補助事業については医学類・医学系とともに十分に検討の上、見直しを図る所存です。同窓会の中核的活動は支部活動およびクラス会活動でございます。昨年は、18支部総会、9学年クラス会開催のご報告をいただきました。ご尽力を賜りました支部長およびクラス会幹事をはじめとする会員の皆さま方に感謝申し上げますと共に、本年もより多くの地域・クラスで総会が開催され会員相互の親睦が深まることを祈念いたします。

年頭にあたり、昨年および本年の母校に関係したことを幾つか紹介させていただきます。

第一には、医学類・系および附属病院における内科再編についてであります。本年は、臓器別内科として機能単位が再編成され、横断的な教育、診療、研究を目指す内科再編が行われ、今後の外科再編と併せて新たな教育・研究・診療体制が構築されることと期待いたしております。2021年度に受審予定の国際認証取得に向けての、海外研修を含むカリキュラム改革とともに大きな成果が得られることを強く願っています。

第二には、平成28年4月に開設された金沢大学先進予防医学研究科の件です。大学

院設置3年目の昨年、9月にドイツ連邦共和国Dusseldorf市において共同大学院を組む千葉大学・長崎大学と共に「ダブルディグリー制度設計のための国際シンポジウム」を開催する等、大学院博士課程におけるDusseldorf大学とのダブルディグリー制度設置の準備が着々と進行しており、早期の制度設置を期待する次第です。

第三には、附属病院に関する件です。昨年1月、最新鋭ロボット手術装置(ダビンチXi)新規購入・使用開始、4月にはがんゲノム医療連携病院に指定され、12月には遺伝子診療部設置・遺伝子診療外来が開設されました。平成16年4月に竣工した中央診療棟の屋上にはヘリポート設置の予定で、その土台が造られました。しかしながら、西側に高さ42mの煙突があり、ヘリコプターの運航に支障をきたすため整備が中断されてきました。その後、平成23年には煙突は撤去され、昨年暮に屋上ヘリポートの整備が着手され、本年5月には運用が開始されることとなりました。地域の「最後の砦である附属病院の使命」を果たす臨床研究拠点病院としてますます充実して参りました。ぜひ、臨床研究中核病院として選定されますことを強くご期待申し上げます。

金沢大学は、平成28年度から始まった第三期中期目標・中期計画において、第3類型、いわゆる「世界卓越型大学」を選択しました。また、平成29年度には世界トップレベルの研究拠点プログラム(WPI)に採択され、「ナノ生命科学研究所」が設置されました。医学類・系におきましては中核として金沢大学の「世界で卓越した教育研究」を牽引されることを強く願っています。

平成は本年4月で終了し、5月から新しい元号が始まります。「かくて明けゆく空のけしき、きのうにかわりたりとは見えねど、ひきかえめずらしきこちぞする」(吉田兼好、徒然草)。この新しき年が、会員の皆さま方にとって、また、母校ならびに同窓会にとって、佳い年、希望の年になりますようご祈念申し上げます。年頭のご挨拶とさせていただきます。

## 就任挨拶



### 小田垣雄二 博士

(昭和57年卒業)

## 埼玉医科大学病院神経精神科・心療内科教授に就任

### 集大成として 死後脳を用いた研究に注力

平成30年10月1日付で埼玉医科大学病院神経精神科・心療内科教授を拝命いたしました。

私は昭和57年に金沢大学医学部医学科を卒業後、ただちに北海道大学医学部精神医学教室に入局し、精神科医としての歩みを開始しました。同大学附属病院とその関連施設での臨床家としての活動とともに、臨床研修を終えた昭和60年からは、精神薬理学領域の実験研究も開始して今日に至っております。平成元年に文部教官助手、平成7年には講師となり、北海道大学には計18年間余りお世話になりました。

その後、ご縁をいただき、平成12年に埼玉医科大学に異動して今日に至っております。埼玉医科大学は母体が精神科病院であったこともあり、埼玉県西部地域はもとより近隣諸都県からも、実に多彩な心身の問題を抱えた

数多くの患者様が来院されます。ともすれば多忙な臨床業務に圧倒される毎日ですが、教育や研究についても可能な限り努力してまいりました。

研究としては、精神疾患の病態生理や治療に関する脳内情報伝達系、特に代謝型受容体とG蛋白との機能的共役について興味を抱き、これまで一貫して続けてまいりました。留学歴としては、時期や期間はさまざまですが、これまで3度海外の研究室に滞在する機会をいただきました(①スウェーデン王立カロリンスカ研究所、②ジュネーブ大学、③マックスプランク精神医学研究所)。この数年は、これまでの研究の集大成として、海外の共同研究者より供与された精神疾患罹患患者の死後脳を用いた研究に力を注いでおります。

金沢大学には卒業以来まったくご無沙汰したまま過ごしてまいりましたが、いつも陰ながら母校の発展を願っております。不肖の放蕩卒業生ですが、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



### 鈴木耕次郎 博士

(平成8年卒業)

## 愛知医科大学放射線医学講座教授に就任

### IVRと画像診断の発展に 貢献

平成30年4月1日付で、愛知医科大学放射線医学講座の教授を拝命いたしました。ここに謹んでご挨拶申し上げます。

私は平成8年に本学を卒業し、名古屋大学放射線科に入局しました。名古屋大学在任中は低侵襲治療であるインターベンショナルラジオロジー (IVR) と腹部領域の画像診断を専門としていました。平成16年にはドイツのアーヘン工科大学に留学し、当時本邦では認可されていなかったステントグラフト、プラグやマイクロスフィアなどの塞栓物質をいち早く経験し、多くのIVR手技で鍛錬を重ねることができました。留学後は、名古屋大学で腹部内臓動脈瘤、ステントグラフト治療、門脈系を中心にIVRを行い、画像診断では特に胆膵疾患の特徴的な画像所見を解析して、

新たな撮影方法の開発と臨床応用にも取り組んできました。その後、平成29年に愛知医科大学放射線科に異動しました。

愛知医科大学の放射線科では、画像診断、核医学、IVR、放射線治療の4分野全てを行っています。医局は中堅、若手の医師が中心で、活気に溢れています。今後は4分野全てにおいて質の高い医療と研究を邁進させ、特色ある医局にしていきたいと思っております。しかしながら画像診断と放射線治療の件数は毎年のごとく増加しており、放射線科医の育成も急務となっています。私が学生時代に金沢大学の放射線科をみて放射線科を志したように、愛知医科大学の学生にも放射線科の魅力を手早く伝えられるように学生教育にも注力していきたいと思っております。

今後も放射線医学の発展に精一杯努力する所存ですので、十全同窓会の皆さまには一層のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

# 受賞

## 秋の叙勲

旭日双光章

旭日双光章

瑞宝小綬章

舂谷

小関

廣瀬源二郎  
(会員Ⅱ)

一宏  
(昭和46年卒業)

支郎  
(昭和47年卒業)

### お知らせ

各支部における同窓生の学術的・医療的活動状況について、寄稿をお待ちしております。

〒921-8640  
金沢市宝町13-1  
金沢大学医学部十全同窓会  
会報編集委員会  
TEL. 076-265-2132  
FAX. 076-234-4208  
Email  
juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

## ISOLS Trainee Fellowship 2018-2019 受賞

林 克洋

(平成9年卒業)

医薬保健学総合研究科

整形外科学

国際患肢温存学会(International Symposium on Limb Salvage: ISOLS)のフェローシップに選出され、イタリア、ギリシャ、オーストリアで計3カ月間研修させてもらうことになりました。貴重な機会をいただき、関係諸先生方に感謝いたします。

我々、整形外科医は、骨肉腫などに代表される四肢体幹発生の骨軟部腫瘍を扱います。骨肉腫の治療方法は、かつては手術しか選択肢がありませんでしたが、切断術を行っても生存率1割という不治の病でした。1970年代に化学療法が導入され、生存率が改善されるとともに、病気のある手足も切断せずに温存することができるのでは、という変革の時代に始まった骨軟部腫瘍の国際学会がISOLSです。金沢大学整形外科学教室でも最も力をいれている学会の一つで、富田名誉教授は第1回目から参加されており、平成29年には土屋教授のもと金沢でこの学会を主催することもできました。

現在の骨軟部腫瘍の治療は、化学療法、腫瘍切除手術、機能再建術、放射線治療、診断、リハビリ、基礎研究など多岐にわたる知識と技術を必要としています。そのような過渡のなか今回のフェロー募集があり、要項としての履歴書、業績、推薦書、抱負などをまとめて提出しました。当然のことながら抱負の1200単語英語小論文には苦労しましたが、その甲斐あって自分が選出され、著名な諸外国の先生のもとで生の治療を体感吸収する機会をいただきました。

本原稿執筆時はまだ研修が始まったばかりですが、早速研修先ギリシャでの教授のパワーに圧倒されています。外来診察の終了は夜中の1時(!)、移動中はスマホの電話、メール、ネットを駆使して様々な情報を収集し、かつ学生や研修にきた自分にも朝から晩までつきっきりで面倒をみてくれています。

3カ月間、国外のさまざまな実情、知識、技術を吸収し、還元したいと思っています。

## EUROSPINE 2018 Travel Grant 受賞

清水 貴樹

(平成23年卒業)

金沢大学大学院医学系研究科

機能再建学(整形外科学)

この度、平成30年9月にスペイン、バルセロナで開催されたEUROSPINE Annual Meetingにおいて、EUROSPINE 2018 Travel Grantを受賞しました。本学会は脊椎単独の国際学会としては世界最大規模の学会であり、各国から多数の脊椎外科医が参加する学会です。採択率は2割程度と厳しめですが、当教室からは、日本最多の13演題が採択されました。

私の本学会での発表内容は『Total en bloc spondylectomy for primary tumors of the lumbar spine (Shimizu T, et al. Medicine 2018)』であり、Quick Fireと称される3分の短い口演発表でした。当教室で開発してきた腫瘍脊椎骨全摘術(TES)の中でも、より難度の高い腰椎TESの成績をまとめたものになります。発表の質疑応答は決して褒められる内容ではありませんでしたが、35歳以下の若手医師5名に贈られるという本賞を幸い受賞することができました。これもひとえに、当教室におけるTESの20年以上に及ぶ技術・知識の研鑽、症例の蓄積のおかげです。今回の受賞にあたり、このような貴重な機会を与えて頂いた土屋教授、村上准教授をはじめ、TESの開発・発展に尽力されてきた同門の先生方に深く感謝申し上げます。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻賜りますようよろしくお願い致します。

# 学会報告等

## 第36回日本眼腫瘍学会開催

日時／平成30年11月3日(土・祝)～4日(日) 場所／金沢市アートホール

2018年11月3日と4日の2日間、金沢市アートホールにおいて第36回日本眼腫瘍学会が開催されました。

本会は、眼科領域の腫瘍とその類縁疾患を扱う学術集会です。眼腫瘍は希少がんのひとつであり、ひとつの病院あるいは地域で経験できる症例数は限られるので、全国から症例を持ち寄って討議できる機会は本学会員にとって大変貴重です。今年度の大会長は、金沢大学医薬保健学域医学類眼科学の高比良が務め、その運営には眼科医局の先生方やスタッフの全面的な協力を得て開催されました。

今回は学会テーマを「境界領域への挑戦」とし、腫瘍とその鑑別が重要な類縁疾患にスポットを当てました。そのひとつの企画はIgG4関連疾患の特別講演であり、本学のリウマチ膠原病内科の川野充弘先生、倉敷中央病院病理診断科の能登原憲司先生、本学の放射線科の井上大先生を講師としてお招きし、

特にIgG4関連疾患と悪性腫瘍との関連についてご講演をいただきました。また、もうひとつは眼科領域の血管腫とその異同が問題ともなる血管奇形などの類縁疾患に関するシンポジウムを企画しました。網脈絡膜、眼瞼・結膜、眼窩の3つの領域の血管腫とその類縁疾患について、まさに今第一線でご活躍されている若い眼科医の先生方にお話しいただきました。一般口演も45演題の採択があり、それぞれにおいて例年のようにとても活発な議論がかわされました。

会期中を通して小春日和の好天に恵まれ、本会としては歴代で最も多い329名の参加登録をいただき、2日間の会を成功裡に終えることができました。ご参加いただきました同門会の先生方、学会員ならびに関係各位の皆様方には厚く御礼申し上げます。

(高比良雅之：記)



## 教授退職記念講演会のお報せ

謹啓 時下ますます御清栄のこととお慶び申し上げます

さて金沢大学医薬保健研究域医学系(分子細胞病理学分野)大井章史教授・金沢大学医薬保健研究域医学系(精神行動科学分野)三邊義雄教授・金沢大学医薬保健研究域医学系(小児科学分野)谷内江昭宏教授には平成31年3月31日をもって医学系教授を御退職されます

それに際しまして、その御高徳と御功績に対し感謝の意を表したいと存じ左記のとおり記念講演会を挙行することとなりました

つきましては、御多用のところ誠に恐縮ですが、記念講演会への御臨席を賜りますようお願い申し上げます

平成31年1月吉日

金沢大学医薬保健研究域医学系長

和田 隆志

記

記念講演会

日時 平成31年1月23日(水) 午後5時30分 から

場所 金沢大学宝町キャンパス医学類G棟2階 第3講義室

演題 「Read Cancer Autobiography」 大井 章史 教授

日時 平成31年3月4日(月) 午後4時30分 から

場所 金沢大学宝町キャンパス医学類G棟2階 第3講義室

「子どものこころの社会実装研究：文理融合・産学官共同・国際交流を目指して」

三邊 義雄 教授

「Ending the Diagnostic Odyssey—希少疾患診断の旅」

谷内江昭宏 教授

(記念講演会後の記念式は行いません)

事務担当 医薬保健系事務部総務課総務係

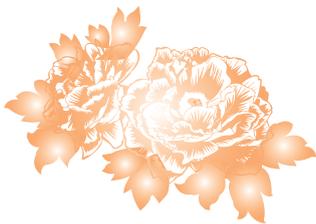
(電話番号) 076-265-2100

# 病院紹介

## 市立敦賀病院

### 地域唯一の中核病院

市立敦賀病院は明治15年2月の県立敦賀病院設置に始まる、開設以来130数年を経過する病院です。昭和30年1月に町村合併により市立敦賀に改称されました。昭和38年3月には改築により一般172床、伝病25床、結核40床となり、平成11年4月に現在の骨格である一般348床(HCU6床を含む)、感染症2床となりました。平成26年10月と27年10月に地域包括ケア病棟を作り、現在は一般229床(HCU6床を含む)、回復期(地域包括ケア病棟)71床、感染症2床となっています。地域の唯一の中核病院であり、急性期、高度急性期の医療の他に、回復期の医療にも注目し、地域のニーズを応じた医療を提供し、地域医療の確保に努めています。



### 質の高い医療の提供と健全経営の確保

自治体病院の倫理綱領行動指針は、1. 地域医療の確保、2. 質の高い医療の提供、3. 患者中心の医療の推進、4. 医療安全の徹底、5. 健全経営の確保 の5つからなっています。より質の高い医療の提供を目的として、日本病院会のQIプロジェクトと全国自治体病院協議会の医療の質評価・公表等推進事業に参加しています。初年度は約1/3の項目が平均を下回っていましたが、2年目には平均を下回る項目がほとんどなく、約1/2の項目で平均を上回ることができました。健全経営の確保に関しては平成21年4月より5カ年毎の中期経営計画を立てて実行しています。職員の頑張りにより平成22年度は7年ぶりに黒字となり、その後も8年間健全経営が続いています。平成28年6月には全国の12病院とともに自治体立優良病院表彰をいただきました。

### 病院完結型医療から地域完結型医療へ

超高齢化社会を迎え、短期間の入院加療では疾病が治癒しない高齢者が多く増えており、地域完結型医療への方向転換が必要となってきます。当院では福井県の公的病院の中では最も早く、地域包括ケア病棟を立ち上げ、地域連携に積極的にかかわってきました。また、敦賀市は内科系の開業医の閉院が続き、県内で唯一訪問診療・往診が減少している地域です。そのため、平成24年4月に総合診療科を立ち上げて医師確保に努め、平成30年4月から訪問診療を開始することができました。平成30年10月には訪問看護ステーションを立ち上げ、訪問看護も始めたところです。

一方、大きな課題は医師、看護師、薬剤師の不足が続いていることです。新専門医制度や働き方改革は地方の人材不足に拍車をかける可能性があります。今後も課題解決に向けて職員一同心をついて取り組んでまいります。十全同窓会の皆さまのご指導・ご鞭撻のほど宜しくお願いいたします。

(病院事業管理者兼院長 米島 學：記)

### 概要

市立敦賀病院	
所在地	福井県敦賀市三島町1-6-60
開設	明治15年2月
病院長	米島 學
病床数	302床
診療科数	21

### 沿革

明治15年	県立敦賀病院開設
明治24年	郡制施行に伴い郡立敦賀病院に改称
大正12年	郡制廃止により敦賀郡町村組合立病院に改称
昭和30年	町村合併により市立敦賀病院に改称

## 独立行政法人 国立病院機構 金沢医療センター



### 創立145年、 地の利を生かした連携を推進

金沢医療センターは、金沢市の中心街に近い小立野台地、日本三名園の一つである特別名勝兼六園に隣接する旧前田藩家老職の奥村邸跡にあり、病院周囲には、金沢市内では最も長い「長土塀」が残されています。明治6年金沢城址に金沢衛戍病院として創設され、明治32年に現在地に新築移転、昭和12年金澤陸軍病院、昭和20年12月国立金沢病院、平成16年独立行政法人国立病院機構に移行し金沢医療センターとなりました。現在、創立145年です。

27診療科、ICU6床、CCU4床、NICU6床、GCU6床を含めて、554床(一般512床、精神42床)で、「がん」「循環器・血管疾患」を中心に総合的・高度医療に取り組みながら、地域医療においても病病・病診連携を積極的に推進し、開放型病床の提供、充実した救急医療体制、がん患者さんを含めた地域包括医療の推進等、地域の中核病院としての機能および周産期母子医療、身体合併症を有する精神疾患医療にも積極的に取り組んでいます。地域がん診療連携拠点病院、地域災害拠点病院、地域医療支援病院、地域周産期母子医療セン

ターに指定・認定されています。また、平成13年から原子力安全対策整備計画に基づき原子力医療センターを設置しています。金沢大学病院に近接するという地の利を活かし、大学と連携し機動性のある医療の提供、行政と連携し医療計画の達成に向けた協力を推進しています。

### 各診療部門の取り組み

当院の診療部門には、血管病センター、がん診療部、母子周産期センターがあり、血管病センターでは、全身の血管を一臓器とみなして血管疾患、特に複合血管疾患を有する患者を関連各科が総合的に診療しています。がん診療部では進行がんや再発がんなどの難治性癌に重点を置いて外科的治療、化学療法並びに放射線療法を中心とした集学的診療機能の強化を推進しています。「外来治療センター」(8床)「がん支援相談室」「緩和ケア内科」を設置し、また、レスパイト入院等で、がん患者さんの在宅医療を支える地域包括ケア病棟の運用も開始しています。母子周産期センターでは、安心・安全な母子周産期医療を提供するため小児科・産婦人科医師が密接に連携し、24時間の救急体制を整えていま

す。また、院内助産制度も定着し、分娩全期に助産師が寄り添い、産後の悩みにも対応しています。

救急・災害医療にも積極的に取り組んでおり、金沢市内の救急搬送、年間発生約2.6万件のうち、2900件、18%を受け入れ、金沢医療センターは最多の受け入れ施設になっています。また、DMAT4隊を有し、東日本大震災・熊本地震の際、現地へ出動し活動を行いました。一方、臨床研究部も設置しており、国立病院機構というネットワークを活かした、治験を含む臨床研究、EBM研究および多施設共同研究を推進しています。

教育に関しては、臨床研修部で臨床および専門研修の管理・指導、また、附属看護学校では、地域医療に貢献する看護師の養成を行っています。

国立病院機構の理念「国民一人一人の健康と我が国医療の向上のため、健全経営のもとに、懇切丁寧な医療を提供し、より良質な研究・教育を推進する」の実現・実行に向けて、病院職員一同、これからも努力を重ねていきます。十全同窓会員皆さまのご指導・ご鞭撻のほどよろしく申し上げます。

(院長 鵜浦 雅志：記)

### 概要

独立行政法人 国立病院機構 金沢医療センター	
所在地	石川県金沢市下石引町1番1号
開設	平成16年4月(国立病院機構)
病院長	鵜浦 雅志
病床数	554床
診療科数	27

### 沿革

明治6年	金沢衛戍病院として金沢城跡に創設
昭和20年	厚生省に移管され、国立金沢病院となる
平成16年	独立行政法人 国立病院機構 金沢医療センターとして移行
平成19年	地域がん診療連携拠点病院に指定される
平成20年	地域医療支援病院に指定される
平成23年	地域周産期母子医療センターに指定される

# 教室だより

## 組織細胞学

(旧解剖学第一)



### 高い志を胸に、金沢から世界へ

平成29年10月より金沢大学医薬保健研究域医学系組織細胞学研究分野の教授に就任致しました西山正章と申します。十全同窓会会員のみなさまには、平素より多大なご支援をいただき、改めて深謝申し上げます。昨年は金沢の秋を満喫したのも束の間、記録的な大雪に見舞われました。北陸の本格的な冬を初めて体験し、九州とのギャップに大変驚きましたが、春の喜びもまた格別なものになりました。今年度からは、助教1名、大学院生3名、医学類生3名が新たに参画しました。この1年、今までに経験したことのない困難もありましたが、縁も所縁もない新しい土地で、新しい人たちと出会い、新しいものを創り上げていく楽しさを、今まさに実感しております。研究室一丸となって金沢から世界一流の研究成果を発信し、金沢大学を世界一にしたいと意気込んでおります。現在、私たちは主に以下の3つのテーマに取り組んでいます。

#### 1. 自閉スペクトラム症の原因候補遺伝子の機能解析

自閉症はコミュニケーション障害および常同・反復的な興味・行動を示す発達障害であり、その発症メカニズムの解明と治療法の開発が強く求められています。近年、自閉症患者の大規模なゲノム解析によってクロマチンリモデリング因子CHD8が最も有力な自閉

症原因候補遺伝子として同定され、世界中で大きな反響を呼んでいます。私たちは最近、ヒト自閉症患者のCHD8変異を再現したモデルマウスを作製し行動解析を行ったところ、このマウスが自閉症様の行動異常を再現することを確認しました [Nature 537: 675 (2016)]。私たちは自閉症の発症時期、責任部位、責任細胞種を特定すると共に、自閉症の発症メカニズムを解明し、これらのモデルマウスを用いて新しい疾患治療法の確立を目指しています。

#### 2. クロマチンリモデリングによる老化とがんの制御機構

組織幹細胞の老化はがんや神経変性疾患などの加齢関連疾患の発症に深く関与しています。最近の知見では、老化した組織幹細胞の機能を回復させることによって、これらの疾患を治療できる可能性が示唆されています。私たちは、クロマチンリモデリング因子CHD8ががん抑制タンパク質p53に結合し、その機能を抑制することによって発生期の器官形成に重要な役割を果たしていることを発見しました [Nature Cell Biol. 11: 172 (2009)]。私たちはCHD8による老化制御メカニズムの全貌を解明すると共に、がんや神経変性疾患などの加齢関連疾患にこのシステムがどのように関与しているのかを明らかにすることによって、「組織幹細胞の若返りによる疾患治療」を目指しています。

#### 3. 精子形成と男性不妊症のメカニズム解明

日本を含む先進国の15%のカップルが不妊であり、その原因の半数が男性側にあります。男性不妊症の主な原因は精子が作られる過程(精子形成)の障害ですが、その機序が解明されたものは多くありません。近年、生殖補助技術の進歩により、精巣から精子が回収できれば、顕微授精によって子供を授かることが可能になりましたが、最終的に挙児を得る確率は依然低いまです。私たちは最近、精巣全体を三次元で解析できる新しいツールを開発し、精巣は均一な器官ではなく、精子形成能に空間的な「偏り」があることを明らかにしました。このツールを用いて、精子形成障害の発症メカニズムを明らかにすることによって、自然妊娠を可能にする治療法の確立を目指しています。

基礎医学は今すぐに人の役に立つようなものではありませんが、今日明日のことを考えているだけでは100年先の未来を創造することはできないのも事実です。既存の概念にとらわれず、若手の多様性に寛容であり、高い志をもって世界のトップレベルで活躍できる未来の医学者を育成したいと考えています。歴史と伝統のあるこの研究室で、新しい時代を築いていきたいと思っておりますので、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、どうかよろしくお願い申し上げます。

(西山 正章：記)

## スタッフ

教授 西山 正章

講師 仲田 浩規

助教 稲生 大輔

山崎 秀一(技術補佐員)、空 麻里子(技能補佐員)、野田 昌生(博士課程4年)、塚本 康寛(博士課程1年)、Kusuma Suphakhong(博士課程1年)、杉本 惇子(医学類3年)、田中 雄大(医学類1年)、中田 卓人(医学類1年)

## メンバー募集!

私たちのラボは、以下のような3つの欲求に応えるべく、皆さんに最高の楽園を提供したいと思っています。

- 1. 生命の真理を解き明かしたいという知的好奇心
- 2. 不治の病気を治すという社会への貢献
- 3. 高い志をもつ仲間との出会い

一生を共にする研究と仲間に出会い、自由な発想で新しい世界を創造して、100年先の未来に夢と希望をもたせる大発見をしましょう! 私たちは、基礎医学と臨床医学の架け橋になるような研究を目指しています。出身学部は問いません。明るく元気で爽やかな人たちを募集しています。詳しい研究内容については、ホームページ(<http://ana1.w3.kanazawa-u.ac.jp/>)をご覧ください、興味のある方はいつでもお気軽にご連絡下さい(nishiyam@staff.kanazawa-u.ac.jp)。

## 臨床薬理動態学 (薬剤部)



### 診療

診療においては、入院および外来処方せんの監査、計数調剤、計量調剤、院内製剤、抗がん剤およびTPNの無菌調製、医薬品の安定供給と安全性、有効性、品質の確保に加え、病棟での入院患者に対する薬剤管理指導、外来化学療法を受ける患者への服薬指導、TDM(Therapeutic Drug Monitoring & Management)、薬物療法の効果と副作用のモニタリング、医療従事者への迅速かつきめ細かな医薬品情報提供(DI)活動、処方支援にあたっています。さらに、特定機能病院の承認要件となっている未承認等医薬品の体系的な把握を含め院内の医薬品安全管理の重要な役割を担うとともに、採用医薬品の管理によって病院経営にも貢献しています。また、先端医療開発センターでも薬剤師がCRC業務を行っています。臨床研究は法律や指針等を遵守し適正に実施する必要があります。様々な職種と協力して、それらが倫理的、科学的かつ円滑に行われるよう支援を行っています。

### 教育

講義としては、医学類3年次の「臨床薬理学」で医薬品の適正使用に必要な薬物体内動態の基礎と病態時の個人間変動、薬物相互作用、遺伝子多型を考慮した個別薬物療法について、また、医療安全、医療倫理、臨床試験に関する講義、さらには薬害被害者やその家族、弁護士等による特別講演なら

びに講義内容を踏まえたアクティブラーニング型授業を実施しています。また6年次「総括講義」や医薬保健学総合研究科医学専攻の「医薬情報統御学特論」も担当しています。臨床教育としては「薬剤部臨床実習」を担当しており、医薬品安全管理とリスクマネジメント、調剤業務、製剤業務、治験薬管理業務、薬剤管理指導業務、TDMを現場にて体験するとともにNPO HEARTアカンサ薬局の協力で地域保険薬局での業務体験を実施しています。

### 研究

より安全で有効性の高い個別薬剤療法の実現のために、製剤特性、病態、併用薬物、薬物トランスポーターや代謝酵素など、治療効果と安全性に影響を及ぼす個人間および個人内の要因を解明するとともに、すべての世代の人々が安心できて持続可能な2040年の地域医療モデルを確立するために、個別薬剤療法確立のための分子薬物動態学的研究や副作用回避のための臨床薬物動態学的研究など、基礎と臨床両面での研究とフィールドワークに取り組んでいます。

最近の主な研究成果は以下の通りです。

1. Contribution of equilibrative nucleoside transporters 1 and 2 to gemcitabine uptake in pancreatic cancer cells. *Biopharm Drug Dispos* 39:256-264(2018)
2. Effect of coadministration of rifampicin on the pharmacokinetics of linezolid:

clinical and animal studies. *J Pharm Health Care Sci* 4:27(2018)

3. Drug interaction between methotrexate and salazosulfapyridine in Japanese patients with rheumatoid arthritis. *J Pharm Health Care Sci* 3:7(2017)
4. Effect of obesity on the transdermal absorption of fentanyl. *Pharmaceutical Sciences World Congress 2017* (2017.5.22-23, Stockholm)
5. 進行肺癌患者に対するFOLFIRINOX療法施行時におけるコリン様症状の発現状況とリスク因子の探索. *医療薬学* 44(8):403-409(2018)
6. ランソプラゾールOD錠とレボフロキサシン錠同時懸濁時における凝集物生成の原因と対策. *医療薬学* 43(1):26-33(2017)

### おわりに

新体制として約5年、医療の高度化も相まって薬剤師の業務範囲が拡大し多岐にわたるようになりましたが、北陸の拠点病院としてさらなる薬剤業務の発展と、それを担う優れた人材の育成に頑張っています。今後も薬物療法の安全性と有効性の確保と患者QOLの向上のために臨床、教育、研究、社会貢献に取り組んでいきたいと思っております。十全同窓会の諸先生方には一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

(崔 吉道：記)

### スタッフ

教授 崔 吉道  
准教授 嶋田 努  
准教授 長瀬 克彦  
特任助教 赤下 学  
大学院生(博士)9名、(修士)1名、  
薬学類生12名  
薬剤部職員 薬剤師57名、技術補  
佐員等6名

### 研究分野の沿革

薬剤部は、本院開設時(1867年)に薬局として設置され、2017年は創基150年の節目の年であった。教室の始まりは1986年、故山名月中初代教授の時代で、薬学部4年生1名、大学院薬学研究科修士1名が配属された。その後、故市村藤雄第二代教授時代に大学院自然科学研究科生命薬学専攻と医療薬学専攻が設立され、宮本謙一第三代教授就任後、医学部大学院の部局化により医学系研究科循環医学専攻医薬情報統御学講座が誕生した。2014年に崔 吉道第四代教授(19代薬剤部長)が就任して研究分野名を臨床薬理動態学として現在に至る。

# 支部だより

## 愛知県支部

このところ大病を患ったり、またロータリーの国際奉仕(東南アジア)への参加等で、同窓会を御無沙汰していましたが、しばらくぶりに第32回愛知十全同窓会に参加しました。

時間に遅れ、近況報告の小森貴先生のお話が始まる時で、いつもなら私の席は第2テーブル席なのに、この日は主賓の方の第1テーブル席で、しかも乾杯担当の荻野先生の隣席。いつの間にか上が少ない年長に、本当に驚きました。後で宗、曾我両先生が都合により欠席されたことを知り、その間の事情がわかりました。

それが縁となり、それまでお話ししたことがなかった荻野先生とお話しすることができ、お陰で先生から日頃の生活の処し方の多くをお聞きし、有意義な時間を過ごさせていただきました。

そのお話の中で、愛知医報の久屋句会の俳句で、宗、荻野両先生と御一緒に、両先生が母校の先輩であることを初めて知り、存じ上げなかったこと、誠に失礼致しました。

普段同期の方や同じテーブル内での会話だけだったので、もっと先輩や後輩の距離を短く、縦横広く、折角の機会を生かし、交流しなければと思いました。小森貴先生は母校の現状報告を細かく話してくださり、更にも往診される舩倉島の話も大変興味深く拝聴しました。

毎年変わりゆく母校の同窓会を、本部の十全同窓会の先生方がお話しくださることは、我々同窓生にとり、金沢や母校を一層身近に感じるとともに母校が発展していることも実感でき、嬉しい限りです。

学術講演では、今年は愛知医科大学・内科学講座の血液内科教授の高見昭良先生が、演題「血液診療のプライマリ・ケア」について話されました。本当に素晴らしい講演で、こうした方が東海、愛知の大学の教授として来られることは我々卒業生としてこの上もない名誉なことです。今までに名古屋大学医学部解剖の酒井先生、同大医学部眼科の寺崎先生や名市大医学部放射線科の大場先生等がお見えになりましたし、他の分野として、大槌焼の大樋氏や明治村建造物担当部長の西尾氏等、金沢にご縁のある多くの方の講演が思い出されます。

こうした愛知十全同窓会の歴史も、小林良彦氏の記載では昭和32年頃より、有志の方々が年に数回集まり、しばらく途絶えてい

たのが、本部十全同窓会の要請で、先輩、若手の先生方数人が集まり、会議の末、昭和62年10月17日(土)規約を定め、名古屋国際ホテルで、第1回の金沢大学医学部十全同窓会愛知県支部が発足。それが月日の経つのは早いもので、今年で第32回を迎えました。もうそんなという感じがします。

「十全」の言葉については、会報で西田先生が、〈十全は中国の周代(紀元前1200年-紀元前256年)の官制を記した周礼の中に『医は十全を以て上と為す』と記載され、東大名譽教授沖中先生も十全は医者の本質を指し示す様に思えると述べてみえる。私も十全という言葉は類い稀な立派な言葉と思う。その言葉を同窓会につけたのは四高の漢文の村上先生です」と書かれています。

愛知十全同窓会がこの様に長く続いて来られたのは係の方や全会員の御努力の賜物で、これからもますます発展してゆくことを願っています。

(横田 徳久：記)



## 関東地区拡大支部

平成24年から定例会場となっている明治記念館において、平成30年も十全同窓会関東地区拡大支部合同総会が8月4日に開催されたので報告する。毎年、この時期は台風だの猛暑だのと大変な1週間なのだが、本年は気温40度を超すかどうかという酷暑だった。2年後の2020年は東京オリンピック開催時期とバッティングすることも、これから考慮していかなければならない。

さて、本年の同会は、明治記念館において、8月4日(第1土曜日)の午後5時から開催された。酷暑の中、43名の会員が参加した。

ここで、本会世話人会のメンバーを記載しておく。神奈川県、埼玉県、千葉県、茨城県、そして東京の各支部長ないし副支部長と幹事からなる。神奈川県支部長は、本年から島利夫先生から若杉内科クリニックの若杉春枝先生に交代、同様に埼玉県支部長瀬戸幹人先生から久慈一英先生に交代した。千葉県支部長はそのまま水真紀夫先生、副支部長高橋敬一先生、茨城県支部長もそのまま諸岡信裕先生、東京支部長は内淵安子、副支部長林同文、三浦順之助である。幹事は、変わらず平松慶博先生、田上恵先生、井田雅祥先生である。6月2日の世話人会において、本年の講演を埼玉県支部の大村健二先生にお願いすることに満場一致で決定された。

開会のご挨拶を、霞ヶ関での会議が長引いて間に合わなかった茨城県支部長諸岡先生から急遽交代して内淵が挨拶をし、新神奈川県支部長になられた若杉先生に乾杯のご発声をいただいた。猛暑のため、脱水を予防して、まずはのどを潤して、講演を拝聴することとした。

中村信一十全同窓会会長の本部からの近況報告は、卒業式や学位記伝達式における十全同窓会の位置づけが重くなったこと、がん研究に威力を発揮している金沢大学ナノ生命科学研究所の紹介、本年の国家試験合格率、卒業後の進路のこと、十全同窓会総会の新役員のこと、大学運営体制、第三期中期計画目標のこと特に世界最高水準の教育研究拠点型の大学の機能強化、研究域の主な出来事や、金

沢大学で推進されている国家的事業、スーパー予防医学に関する3大学共同大学院の設置、WHOコラボレーティングセンターのこと、超然プロジェクト、先魁プロジェクト、そして、宝キャンパスのこと、外国人留学生がどんどん増加していることなどが紹介された。近未来の金沢大学医学部

に大きなわくわくした目標があることが全員に伝わったと思う。

中村信一会長の近況報告の後には、本年は、昭和55年卒の上尾中央総合病院栄養サポートセンター長大村健二先生にご講演をお願いした。タイトルは、「100歳まで元気を目指す食～都市伝説に惑わされないように～」。

先生は、金沢大学第1外科に入局後消化器外科を専攻し、外科医の立場から栄養学を究め、がん患者の栄養管理、褥瘡と栄養管理、高齢者の栄養管理、リハビリテーション栄養の著書を数多くまとめておられる。

栄養のこと、食べ物のことについて、新聞、テレビで、目や耳にしないことは1日たりともない。しかし、そこに、まことしやかな都市伝説がはびこっている。野菜は体にいいとか、糖質や脂質はたくさん食べてはだめとか、栄養を取るとがんが大きくなるとか、野菜をたくさん摂るとがんの進行を防ぐことができるなどなど。これらの都市伝説ひとつひとつを見事に科学的に正論をもって論破されたのであった。



### 栄養の命名

須藤 憲三 先生  
(1872 - 1934)

「栄養」という字は須藤先生の提唱によるものです。「営む」ではなく、「養い栄えさせる」のが栄養学の目標とおっしゃっていました。須藤先生が森鷗外や尾崎行雄先生などの支持を得て今日の栄養に改められたのです。

(田中 静雄, 竹田 亮祐. Diabetes J. 8, 101-7, 1978)

金沢大学の前身である金沢医科大学生化学初代教授須藤憲三先生が命名された「栄養」。今日ほど、栄養学の大事さが叫ばれることがないのではないかと。高齢化時代に入っ来て、サルコペニア、フレイルという言葉が日常化するほど、わが身の骨格筋を維持していくには、だれも栄養をないがしろにできないのである。

懇親会では、全員から近況を報告いただいた。例年、埼玉支部前会長瀬戸先生のギターに合わせて四校寮歌を斉唱していたが、瀬戸先生の出席が叶わないので、東京都支部の副支部長三浦順之助先生と女子医大勤務の先生らとの弦楽四重奏による音楽を堪能した。四校寮歌もいいのであるが、生クラシックもいいものであった。

来年も、8月第1土曜日、明治記念館、午後5時からである。ぜひ、多くの会員に参集をお願いしたい。

なお、本年の写真も東京都支部会員谷口誠先生の腕による力作である。

(内淵 安子:記)



## 支部だより

### ボストン支部

Bostonの短い夏も終わりを告げる9月、広瀬竜夫支部長のもと、Boston支部会を開催しました。Dana-Farber Cancer Instituteより中河先生、新入会の星居先生、Joslin Diabetes Centerより原島先生、新入会の井川先生、Brigham and Women's Hospitalより寺本先生、岩田、University of Massachusettsより新入会のHan先生が集いました。また、元支部会員の血管分子生物学(旧生化学第二)の山本靖彦教授と、保健学科浅田先生、北川さん、鈴木君にも参加いただきました。

それぞれの立場から、いろいろな話題があり、とても有意義な会となりました。おいしい料理と尽きない話で、あっという間に2時間が過ぎました。Bostonで金沢大学関係者が集える機会に感謝しつつ、閉会となりました。

した。

支部会を開くにあたり、同窓会より補助いただきましたこと感謝申し上げます。

(岩田 恭直：記)



### 静岡支部

今年の十全同窓会静岡支部総会は、10月13日静岡市のホテルセンチュリー静岡で開催された。10月の第2土曜日という学会等と重なる日であったが、静岡県東部、中部、西部から計16名の会員の先生方にご参加いただいた。本部からは消化器・腫瘍・再生外科学教授の太田哲生教授にご来静いただき盛況のうちに会を終えることができた。太田教授は昭和54年卒業であり、当番幹事の小生や西部地区の神谷先生、また当日急ぎよ参加してくれた現在は大阪ご勤務の諏訪先生と54年卒業の同期が揃い、懐かしい思い出に浸ることができた。

支部長の佐野勉先生からのご挨拶により開会し、引き続き太田教授には金沢大学附属病院・医学類の近況報告と最新のがん免疫治療の話題をご講演いただいた。年々発展していく母校の現状と本年のノーベル医学生理学受賞で話題になった本庶佑先生にも関連したがん免疫治療の進歩についてお話いただき、

最近の医学の進歩に驚きながらも興味深いご講演を拝聴できた。

講演後は懇親会に移行し、恒例の会員スピーチを交え親睦を深めることができ、その後の二次会へも教授をはじめ多くの先生方にご参加いただき、盛会裏に会を終えることができた。

来年は中部の石神直之先生の幹事で静岡市にて開催される予定である。

当日の出席者：太田哲生教授、以下、敬称略(卒業年)。佐野勉(昭和44年卒業)、佐

野三枝子(昭和44年卒業)、土屋和弘(昭和44年卒業)、岡井高(昭和52年卒業)、東茂樹(昭和52年卒業)、藤木明(昭和52年卒業)、石神直之(昭和53年卒業)、加藤政利(昭和54年卒業)、神谷純(昭和54年卒業)、諏訪秀幸(昭和54年卒業)、梅原靖彦(昭和58年卒業)、大場範之(昭和58年卒業)、小山澄美子(昭和58年卒業)、富松功光(昭和58年卒業)、坂東悦郎(平成4年卒業)、内田律子(平成9年卒業)

(加藤 政利：記)



## 福島県・山形県 合同支部

平成30年10月27日(土)、福島駅近くのホテル辰巳屋で、福島県と山形県合同の十全同窓会が初めて開催されました。

2年前に金沢で開催された十全同窓会総会で初めて福島県支部長の竹田洋介先生とお会いし、合同の同窓会をやってみましょうと話しあいました。お互いの同窓会員に諮って同意を得て、今年4月頃からメールを交換しながら場所と開催日を決め、ゲストには、中村同窓会長のご都合がつかず、竹田先生と同級の竹村博文教授(先進総合外科)をご招待することになりました。当日の参加者は福島県から6名、山形県から4名、竹村教授を入れて計11名でした。

竹田先生の司会で、支部長の挨拶があり、その後竹村教授から整備が完了した医学部、病院の様子をスライドで示しながら説明して頂き、さらに「心カテーテルによる大動脈弁置換術の進歩」について講演していただきました。内視鏡やカテーテルによる手術の発達で患者さんの負担が軽減され、回復も早いのに感銘を受けました。

引き続き、福島県の各会員、山形県の各会員の順で自己紹介がありました。福島県立医科大学のリハビリテーション科の大井教授、耳鼻咽喉科の室野教授の自己紹介があり、大

井先生は埼玉医科大学から、室野先生は直接金沢大学の耳鼻咽喉科から赴任されたとお話がありました。山形の池田利史先生が自己紹介をしている時、大井教授が、あの「伝説」の池田先生ですか！と叫び、皆何が「伝説」なのか分からず、医学部の野球部では池田先生の活躍が「伝説」として伝わっていると説明され、私も初めて聞く話でびっくりでした。

福島医科大学の名誉教授、福島匡昭先生に30年くらい前に山形支部の総会に来ていただいたことや、11名の集まりだと一人一人の話がよく聴こえて昔の話で盛り上がりました。新しい出会いは思いがけないエピソードを掘り起こします。同窓会がお開きとなり、山形組はタクシーで高湯温泉の安達旅館に戻り、二次会を開きました。石橋先生持参の赤ワインをいただき、温泉の硫黄の香りにつつまれてお休みしました。

翌日、竹村教授と竹田先生は石橋先生の紹介で米沢に行き、美味しい米沢牛のステーキとワインを堪能したそうです。福島県支部の先生方、竹村教授、楽しい同窓会と一緒にしていただきありがとうございました。今度は山形に来ていただき、合同同窓会を開催するのを楽しみにしております。

出席者

金沢大学医学部：竹村博文(昭和60年卒業)  
福島県：福島匡昭(昭和34年卒業)、斉藤光正(昭和40年卒業)、大井直往(昭和57年卒業)、竹田洋介(昭和60年卒業)、室野重之(平成4年卒業)、尾形洋平(平成26年卒業)  
山形県：石原融(昭和46年卒業)、森谷直樹(昭和47年卒業)、池田利史(昭和50年卒業)、石橋正道(昭和61年卒業)

(森谷 直樹：記)



## 京都支部

平成30年10月27日(土)に、昨年同様、京都ホテル・オークラ『桃李』で平成30年度金沢大学医学部十全同窓会京都支部総会が開催されました。昨年は中村信一同窓会長をお招きして盛大な会でしたが、今年は夫婦同伴3組を合わせて11人の出席でした。

昭38年卒の松本由朗先生は今も悠々自適

で池波正太郎を3度も読み返し、近くを散歩したりとお元気です。昭41年卒の若泉悟先生は診療所を息子さんに譲って手伝いをしながらゴルフ三昧です。昭53年卒の小野聡先生は十数年間幹事役を引き受けてもらっています。小野先生がおられなければ京都支部は持ちません。ワイン好きは今も続いている一家言を持っておられます。射撃が以前からの趣味で、20年のオリンピックではドーピングのお仕事で奉仕されます。奥様も金大文学部出身と一緒に世話くださっています。言語聴覚士をしておられ、難聴の患者さんの

相談にのっておられます。うちの家内も小野先生に診てもらって奥様にアドバイスをいただき補聴器をつけてよく聞こえるようになりました。同学年の辻和夫先生も幹事に加わってもらっています。アイデアマンです。診療を週3回にして、あとは琵琶湖のほか瀬戸内海の島々をヨットで訪ね歩き、小さな島を訪れた時に見つけられた真っ赤な鮮やかに光った唐辛子を出席者に配ってくれました。どの料理に使うかと家内と楽しみにしています。昭49年卒の桑原正喜先生は京都府南部の岡本記念病院で呼吸器外科を立ち上げられ、今

## 支部だより

は後輩の指導にあたっておられます。肺がん患者を次々と発見され、手術のほかにも遺伝子解析で適切な抗がん剤が選択でき、治療効果が上がってきて長期予後が3-4年に延びてきたと言っておられました。また昨年の中村信一先生の腸内細菌の講演の後、興味を持たれ腸内細菌の魅力を語っておられました。また、今まで世話をしてもらった奥さんに少しは報いたいと思うがあと数年は今の仕事をしなくてはならないと言っておられました。心根の優しい先生です。僕も少しは見習わなくちゃと思いました。昭和56年卒業の栗野菊雄先生が久方ぶりの出席でした。京大農学部卒業後大学院を終えてから医学部に入学されました。学生時代は山岳部で剣岳など数々の山に登った話を辻先生と懐かしく語り合っておられました。昭和57年卒業の今井博之先生は小野先生と一緒に幹事を手伝ってもらっています。小児科で子供の診察の合間にインフルエンザワクチン接種が入り大変だと悲鳴を上げておられました。この秋の台風で停電騒ぎがあり、ワクチンの管理に苦労したと言っておられました。平成元年卒業の阪上順一先生は初めての参加で待っていたのですが、

急用で来られなくなってしまいました。来年は参加して下さる予定です。京都府立医大の消化器内科で膵臓を専門にしておられます。僕も患者さんがお世話になっています。松本君と同じ昭和38年卒業の僕、八田一郎は今年6月に、パリに住む知人に誘われて、クロアチア・ドブロヴニクで開かれた小さなフェスティバル(テーマは「日の出づる国」)に、昨年描いた「僕のお地藏さん」の25号の油絵をもって出品してきました。機内での運搬が不安でしたが無事持っていくことができました。ドブロヴニクはアドリア海の真珠と言われていて世界遺産に登録されています。

話はずんで楽しくて、うっかり記念写真を撮るのを忘れてしまいました、すみません。

後日、少し会員の消息を尋ねました。昭和24年医専卒業の青木昭先生は足腰が弱ってきて外出は減ったが囲碁は続けているとお元気な声でした。昭和24年卒業の中村晋先生は平地は歩けるが階段が苦労すると週1回りハビリを受けておられますが、日本医師会雑誌の毎月の特集のテーマの論文を読み、後の問題集に解答して投稿しておられます。すごいです。昭和34年卒業の加納昭子先生は「す

べて娘に頼って、友達や娘と出かけています」と明るいお元気なお声で答えてくださいました。昭和35年卒業の松山均先生は足腰が弱って奥さんに支えてもらって俳句の会に出ておられます。息子さんの平成4年卒業の徹先生はお父さんの後を引き継いで福知山の人々のために活躍しておられます。昭和58年卒業の三木秀樹先生は宇治おうばく病院長として重責を担っておられます。お元気なお声でした。

追伸：来年は関西支部総会が京都支部の主催で開催されます。みんなで京都円山公園の花見を楽しもうと企画し、3月31日(日)にすぐそばの長楽館で開催されます。長楽館は、明治の煙草王と呼ばれた実業家村井吉兵衛により国内外の賓客をもてなすための迎賓館として建てられたもので京都市有形文化財に指定されています。一人でも多くの先生方へ出席していただきたいと準備を進めています。どうぞご出席くださいますよう、よろしくお願ひ致します。

(八田 一郎：記)

## 岡山支部

平成30年度金沢大学十全同窓会岡山支部会が12月1日(土)、メルパルク岡山において開催されました。

岡山支部では毎年この時期に同窓会を開催させていただいております。今回はほぼ毎年出席されている常連の先生方ばかりで、初参加の先生はおられませんでした。参加者は卒業年度順に昭和51年卒業 寺沢明夫先生、平成8年卒業 浅海浩二(筆者 岡山支部長)、平成9年卒業 高木徹先生、平成11年卒業 西川敏雄先生、平成12年卒業 梅原憲史先

生、平成12年卒業 門田弘明先生、平成12年卒業 横溝智先生、平成13年卒業 杉山成史先生の8名でした。

美味しいお酒と料理をいただきながら、学生時代に戻ったように金沢での懐かしい話で盛り上がり、あっという間に時間が過ぎていきました。

また来年もお会いできることを約束して、会を終了させていただきました。

今回も幹事の杉山先生に大変お世話になり無事に会を終えることができました。来年度は早めに声をかけて参加者を増やし、金沢から遠く離れ

た岡山での金沢大学出身者の繋がりを深めてまいりたいと思います。

(浅海 浩二：記)



# クラス会

## さんご会

昭和35年3月に卒業した我々は、昭和37年12月に、当時母校の泌尿器科に入局していた稲葉君等3名が幹事を務めて、金沢市片町の「味苑」で、クラス会を開いて以来、ほぼ毎年、北陸3県の各地をはじめ、当番幹事の居住地に会場を設営して、名称を「さんご会」と称えて、年に1度の会合を続けてきた。

本会報にも折々の幹事諸君が、レポートを掲載してきたが、平成26年には名古屋市在住の横田君が「十全昔話」に詳細な記事を寄稿している。

平成27年の会合の際には、十全同窓会長だった佐藤君の案内で、全面改築された母校の諸施設を見学し、十全記念館で往時を偲んだ。

会員が後期高齢者となった頃から、徐々に会員の訃報が増えてきていたが、今年、55回の当番幹事で「東京湾クルーズ」を企画してくれていた畑尾君が急逝したため、「さんご会」は会場を富山市の「リバーリトリート雅楽俱」に変更して、10月7日に布谷君以下、富山県



内在住者が幹事を務めて開催の運びとなった。

台風25号の影響で、富山県内では6日夕方に、北陸新幹線・JRが計画運休したので、参加者が無事に到着できるかと心配したが、幸い当日は交通に支障なく、「第55回さんご会」は定刻通りに開催された。

今回は豊橋市在住の塩之谷君が、24号台風で診療所が被災したため欠席した他、3名が体調不良等の理由で参加できず、本人17名、同伴者10名の27名で開宴した。

塩之谷君は、この会のために、学生時代に自身で撮影した8mm映画をCDに再編集して送付してくれていたため、布谷君がこれを会場で映写して、昭和34年当時の学生生活を偲んだ。また自身が昭和51年に蒲郡市で

幹事を務めた際の写真をアルバムにまとめて会員に配布してくれたが、当時の出席者の5割はすでに鬼籍に入っていた。

以前は総会の翌日に、ゴルフコンペと観光が用意されて、同伴者ともども楽しんでいましたが、今回は割愛されて、今回は卒後60年に当たる2020年(改元2年)に石川県在住者が幹事となって開催されることが決まり、午後9時に散会となった。

出席者：内山、風間、河田、北川夫妻、熊谷愛、熊谷武、佐藤夫妻、蘇原、篁夫妻、筑田夫妻、中島夫妻、布谷夫妻、野田、半田夫妻、松原夫妻、山崎夫妻、横山夫妻

(熊谷 武夫：記)

## 三八会

平成30年9月22日、オクス・カナルパークホテル富山にて開催いたしました。出席者は夫婦同伴12組、単身が10人、合計34人。

開宴に先立ち、物故された山崎義亀と君のご冥福を祈り、黙とうを捧げました。

懇親会は土田豊幹事の挨拶の後、飯泉修君の乾杯の発声で始まりました。座が和んだ頃より恒例の各自の近況報告に入り、さらに座が乱れると共に皆さん学生時代にかえり、楽しい思い出話に花が咲きました。

三八会は昭和38年に卒業して以来毎年開催し、今回で55回を数えます。次回は来年、石崎宏君を中心に金沢にて行われます。

翌日9月23日の観光ツアー富岩クルーズ



は福田孜幹事の引率のもと執り行われました。天候にも恵まれ、中島開門を経て岩瀬浜まで約1時間の船旅を満喫。体力に余裕のある方は岩瀬市街や北前船廻船問屋「森家」の観光も楽しみました。

昼食は「松月」にて富山湾の幸シロエビを中心とした和食を賞味。

「松月」よりバスにてカナルパークホテルに戻り、来年の再開を期して散会。

(青木 周一：記)

## クラス会

### 天孫会 (昭和42年進学生)

昭和42年進学生同窓会(天孫会)を、平成30年10月13日富山市のANAクラウンプラザホテル富山で2年ぶりに開催しました。私たちは昭和45年から46年にかけての学園紛争、ストライキの影響で卒業時期が分散したため、昭和42年進学生としてまとまり同窓会を開いています。天孫会の名付け親は細菌学の故西田尚紀先生で、気分の盛り上がり、緊張を意味するテンションをもじて付けていただきました。

今回は同窓生35名、ご夫人同伴7名で計42名出席の天孫会になりました。榎戸さんの司会で始まり、飯田が開会の挨拶をした後、物故者16名を偲んで黙祷をしました。続いて最も遠方の沖縄県うるま市から参加した喜屋武君の音頭で乾杯し、宴会が始まりました。開宴後間もなく、宮森君の奥さんのピアノ伴奏で葉袋君のカン

ツォーネ独唱があり、アンコールで「千の風になって」も唱ってくれ大変盛り上がりしました。その後、能登君が撮った金沢大学附属病院と医学部の最近の映像、学生時代の写真や過去の同窓会の懐かしい写真などのスライドショーがありました。幹事の嶋尾君と小関君が持参してくれた「勝駒」や「羽根屋」の大吟醸など富山の銘酒を味わいながら、各テーブルで会話が弾みました。40年以上会っていなかった友人達が、誘いに応じて富山に来てくれ嬉しかったです。

宴もたけなわとなったところで、全員が各自1分間のスピーチで近況を報告しました。欠席者の数人は体調がすぐれないとの連絡が

ありましたが、出席者は皆元気で、70歳を過ぎてても現役として診療に従事している人がほとんどでした。なかでも服部君は、現役の研究者として米国ボストンと京都医療センターで糖尿病性腎症の研究を継続し、成果を上げているとのことでした。

あっという間に2時間余りが経ち、岡田君が閉会の挨拶、一本締めをし、記念の集合写真撮影後、一次会をお開きにしました。次回は福井県と同級生に幹事を願ひし、2年後に開催の予定となりました。その後二次会に場所を変えて、夜遅くまで旧交を温めることができ楽しいひと時でした。

(飯田 博行：記)



### 四三同窓会

平成30年6月16日(土)、卒後50周年記念同窓会をホテル日航金沢にて開催しました。卒業生78名中物故者は15名。参加者は45名(夫人同伴は3名)。

開会に先立ち、前回の富山での同窓会以降に亡くなった3名に黙祷を捧げた。

学園紛争にて卒業式のなかった学年である。会は幹事の佐藤隆君による卒業前の大学側との交渉の経緯の話から始まった。

高島茂樹君の音頭にて乾杯のあと、最遠隔地(福岡)から出席の荒木富士夫君の司会に



て1分間スピーチが行われた。前もって「金沢大学医学部卒後50周年記念誌」が編集され、1カ月前に配布されていたので、「あんた、誰け？」は少なく、学生時代に戻った感覚で、

“〇〇君”と呼び合って楽しい時間を過ごすことができた。

同級生には金沢大学学長、金沢医科大学理事長のほか、金沢大学、富山大学、福井大学、

奈良医科大学の教授、多くの助教授経験者がいる。また、金沢市医師会長、平塚市医師会長など医師会役員経験者、イタイタイ病資料館長などの施設長経験者、珠洲市総合病院で40年にわたりへき地医療を支えてきた波佐谷兼綱君をはじめとした地域医療に貢献している者など、多彩な領域で足跡を残していた。

多くのものがこの歳になっても仕事を持っており、教育を受けさせてくれた金沢大学医学部に感謝すると共に、素晴らしい仲間を持ったことを誇りに思った。

締めは島田公雄君の音頭により、「北の都」

を声張り上げて合唱し、健康を保持して5年後に福井で再会することを願って散会した。

追・翌6月17日は医学部事務局の方の配慮にて、医学部と病院の一部を案内していただいた。ありがとうございました。

出席者

前列左より・佐藤清、岡村利勝、高島茂樹、中村信一、石田美江(酒井)、石田東生、三宅隆、土肥和紘、室谷静雄(五十嵐)、清光義則、二列目・三宅隆夫人、飛見昭子(平田)、河

合克弘、島田公雄、杉野実、本多幸博、森厚文、羽場勝彦、渡部秀人、鏡森定信、今井武司、三列目・武川慶孝夫人、武川慶孝、木下勝、佐藤隆、久保田紀彦、花岡卓二、中村忍、西村功(本谷)、舟津敏朗夫人、今井武司夫人、四列目・二宮立三、波佐谷兼綱、丹後正紘、山口昌夫、山内雅博、竹越靖夫、清水巍、小野江信介、舟津敏朗、四列目・年澄徹、生垣正、伊藤忠弘、荒木富士夫、尾山淳

(尾山 淳：記)

## 昭和63年卒業生 同窓会

平成30年9月23日(日)、3連休の中日に卒業後初めての同窓会が金沢で開催されました。同窓会に先立ち、すっかり新しくなった宝町キャンパスのキャンパスツアーが快晴のもと行われました。野村(英樹)君のガイドのもと、16名の同級生が参加し、懐かしいキャンパスを散策しました。大きく変わったキャンパスの中に、わずかに変わっていないところを見つけ出して懐かしく思ったり、医学教育が大きく変わっているが、昔ながらの学生気質があるなど話題が尽きませんでした。

滝野君、高島君の野球部コンビの司会ではじまり、鬼籍に入った同級生に黙祷を捧げました。懐かしい、在りし日の姿をスライドで映しながら、心からのご冥福をお祈りしました。昭和63年3月に卒業した後、あっという間にすぎた30年間を56名の参加者で共有しました。

同窓会には、金沢大学十全同窓会会長の中村信一前金沢大学学長にもご臨席をいただきました。そして、冒頭に温かいお言葉をかけていただきました。昭和最後の卒業生であり、また平成最後の年に卒業以来30年ぶりの同窓会となり、メモリアルな会であるとお話いただきました。当時、微生物学の助教授で



あり、講義、実習の思い出話に花が咲きました。今回の幹事のリーダーを務めてくれた田口君が久しぶりの再会への思いを語り、久闊を叙する雰囲気盛り上がっていきました。スライド化した卒業写真をみて、まずこの30年間の自分自身の変貌に今更ながら驚きの声が上がりました。キャンパスツアーに参加できなかった同級生もいることから、新たな医学類、附属病院のスライドも見ながら乾杯となりました。会が始まった直後から、食事もそこそこに、あちこちで同級生の輪ができ、一気に懐かしい学生時代にクロックバックしました。

遠く岩手から参加してくれた小山田君のスピーチを皮切りに、司会の2人からランダムに指名された同級生から次々に楽しい近況報告がなされました。集合写真の撮影も和やかな雰囲気で行われました。田口君の総まとめ、

野村君のキャンパスツアー、柴田君、荒木英雄君、高橋君、和田の受付と会計、滝野君、高島君の司会、と幹事の間でもうまく連携が取れたと思います。次回の幹事は篁君、土谷君、竹内君、伏田(池田)さん、瀬戸君、花岡君、高田君、山上君と決まりました。W杯にちなんだ4年後に、元気に笑顔で再会することを誓いました。

引き続き、同じホテル内で二次会が開けられました。予想をはるかに上回る参加があり、少し手狭だったのはうれしい悲鳴でした。翌日にはゴルフコンペも企画されました。さらに宴席は盛り上がり、三次会へと河岸を変え、夜がふけるとともに三々五々解散となりました。半数もの同級生が集まってくれた賑やかで楽しく、充実した同窓会でした。

(和田 隆志：記)

# 同窓生の消息

第58回日本核医学会学術総会 開催報告  
 国立精神・神経医療研究センター  
 脳病態統合イメージングセンター

## 松田 博史

(昭和54年卒業)

平成30年11月15日～17日の3日間、沖縄県宜野湾市の沖縄コンベンションセンターにおいて第58回日本核医学会学術総会が開催されました。合計で1858人が参加し、国内学会にもかかわらず約100人が海外(米国、ドイツ、ベルギー、オランダ、中国、台湾、韓国、タイ、ネパール、インド、ポーランド、ノルウェー、オーストラリア、チュニジア)からの参加者でした。

一般社団法人日本核医学会は、核医学研究の推進と発展を図ることを目的とし、医師、薬剤師、工学士、看護師、放射線技師などからなる多職種横断的な学会です。大会は58回の歴史を有し、すでに多くの十全同窓会員が学術総会の会長を務められています(第10



回;平松 博、第18回;久田欣一、第41回;利波紀久、第49回;油野民雄、第55回;小泉 潔、敬称略)。私の所属施設は東京なのですが、今回はアジアの研究者がアクセスしやすい沖縄を開催地とさせていただきました。総会において11月17日～19日までの3日間、台北で開催された東アジア核医学会とのジョイントシンポジウムを企画し、多くの海外研究者の参加を得ました。今後、日本核医学会総会はアジアの核医学研究者が集う重要な会議として位置付けられていくものと期待されています。そのために、一般演題のスライドは英語とし、シンポジウムの半分は海外研究者を含む英語セッションとしました。

今回の核医学総会のメインテーマは“治療に活かす核医学の技－創薬からTheranosticsまで”でした。種々の画像モダリティの中で、核医学の役割が大きく見直されてきています。分子イメージングの分野では、核医学機器の進歩も相まって他のモダリティの追随を許さず、創薬や治療において必須のモダリティとなっています。本大会では、この方面の著名な研究者による特別講演やシンポジウムが大きく取り上げられました。

総会ではノーネクタイを推奨し、“かりゆし”のレンタルも行い、くつろいだ雰囲気でも活発な討議が3日間なされ、盛会裏に終了いたしました。

国際病院連盟大賞特別賞を受賞して  
 社会医療法人財団董仙会恵寿総合病院理事長

## 神野 正博

(昭和61年卒業)

国際病院連盟で2015年に創設された国際病院連盟賞は2018年版は春に公募された。リーダーシップとマネジメント、患者安全、病院の社会的責任の3部門で募集され、総数160(33か国118組織)の応募があった。この中から審査の結果、3部門での賞に加えて、その上位として大賞のファイナリスト6が7月に発表され、10月10～12日に豪州ブリスベンで開催された第42回世界病院学会の初日に、会場で賞の発表と授賞式が行われた。恵寿総合病院からは私が出席、特別賞を受賞し、国際病院連盟会長から表彰状の授与がなされた。

受賞内容は、Keiju Integrated Healthcare Service – Cooperation of Integrated Health Records and Human interface – で、私たちが能登地域を進める医療～介護のすべ

世界病院連盟会長(写真左)らと筆者(写真右から2番目)



でのサービスの記録を統合した電子カルテ情報とその情報へ患者・利用者、職員が容易にアクセスするためのコールセンターシステムの仕組みだ。

患者・利用者は問い合わせばかりではなく、診療や介護サービス、あるいは送迎サービスなどの予約やキャンセルが可能だ。また、職員は声や手書き記録の電子カルテへの代行入力をコールセンターに依頼することができる。

今回の受賞は、世界一の高齢化国日本の中でも、さらに高齢化が進んだ能登だからこそ医療～介護情報の統合システムが必要で、しかも高齢社会に優しいヒューマンインターフェイスを利用した私たちの考え方が世界で評価されたものと自負したい。残念ながら、最高賞である金賞を逃したが、日本に続き高齢化

が進む世界各国から注目されたと確信した。

この学会のテーマは、Innovation, Integration, Inspireとされ、私たちのIntegrationモデルが時宜を得たものであった。また、わが国が進める地域包括ケアシステムの国際的な概念と理解できるMedical Neighborhood(医療の隣人たち)をテーマに多くのディスカッションがあった。中心にいる患者の隣人に様々な医療、地域コミュニティ、生活サービスが取り囲むといった概念だ。そういった意味で、世界の病院が取り組まねばならない問題が妙に共通していることを肌で感じた。

# 金沢から世界へ発信

## 肝細胞癌の画像バイオマーカーとしてのGd-EOB-DTPA造影MRIの可能性

放射線科学

北尾 梓

肝特異性MRI造影剤(Gd-EOB-DTPA、EOB・プリモピスト®、パイエル・シェーリング社)が本邦で発売されて10年が経過した。Gd-EOB-DTPA造影MRI(以後EOB-MRI)は従来の画像診断法では検出が困難であった微小肝細胞癌や早期肝細胞癌の描出能を飛躍的に向上させ、肝細胞癌の診断において不可欠な役割を果たしている。Gd-EOB-DTPAは静脈から注入された後に肝細胞に取り込まれ、胆汁中に排泄されるという特殊な体内動態を示す。注入から15-20分以降に撮影する肝細胞相で、造影された肝実質とのコントラストにより病変を検出することが可能である。通常肝細胞癌は背景肝と比較して肝細胞相で低信号を呈し、Gd-EOB-DTPAの取り込み機能の低下が推測されていたが、その詳細な造影機序については十分に解明されていなかった。

我々は肝細胞癌において、organic anion transporting polypeptide1B3(以後OATP1B3)の発現がEOB-MRI肝細胞相での造影効果と相関することを示し、OATP1B3がGd-EOB-DTPAの細胞内取り込みに関与する主要な肝細胞膜トランスポーターであることを明らかにした(Radiology 2010)。

さらに我々は異型結節からの多段階発癌の過程でOATP1B3の発現が低下し、EOB-MRI肝細胞相での増強効果も低下していくことを示した。特に早期肝細胞癌の70%でOATP1B3の発現が減少しており、EOB-MRI肝細胞相で低信号病変として早期検出が可能である成因と考えられた(European Radiology 2011)。

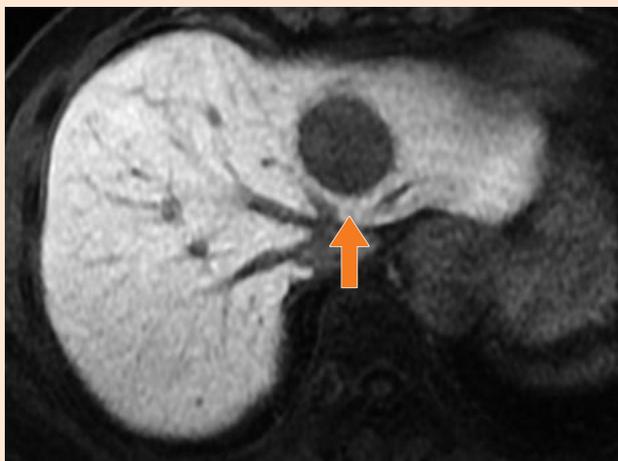
多段階発癌に関する検討の中で、肝細胞癌のうち10%の頻度でOATP1B3の発現が増加し、EOB-MRI肝細胞相で高信号を呈する一群が存在することも明らかとなった。その高信号肝細胞癌は門脈浸潤の頻度が低く、血清AFPならびにPIVKA-IIが低値で、術後の無再発生存率が高いという特徴を示し、悪性度が低い亜型である可能性が示唆された(Radiology 2012)。

肝細胞癌におけるOATP1B3発現に着目し、金沢大学附属病院消化器内科との共同研究で遺伝子解析を行った。OATP1B3の発現が高い肝細胞癌(肝細胞相高信号肝細胞癌)は、OATP1B3の発現が低く血清AFP

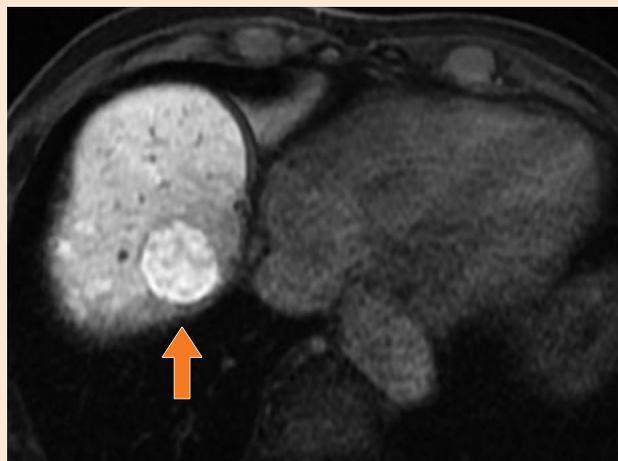
値が高い肝細胞癌とは全く異なる遺伝子発現パターンを示していた。さらに転写因子hepatocyte nuclear factor(HNF)4 $\alpha$ によって、OATP1B3の発現が制御されている可能性が高いことが示された(Hepatology 2014)。

ついで我々は、 $\beta$ -cateninシグナル伝達経路が活性化した肝細胞癌では、OATP1B3の発現が増加しており、EOB-MRI肝細胞相での造影効果が高いことを明らかにした(Radiology 2015)。さらに $\beta$ -cateninとHNF4 $\alpha$ の両者の発現が、肝細胞癌におけるOATP1B3の発現増加とEOB-MRI肝細胞相での造影効果の上昇に関与することを示した(Hepatology Research 2018)。 $\beta$ -cateninとHNF4 $\alpha$ との相互作用により肝細胞癌における上皮間葉転換や幹細胞様形質発現を抑制するという報告も認められており、高信号肝細胞癌における低悪性度の成因となっていると推測された。

このようにEOB-MRIはOATP1B3のみならず、関連する多くの分子・遺伝子の発現を反映する可能性がある。肝細胞癌の遺伝子発現が画像診断により推測可能となれば、組織採取を行わずに悪性度や予後の推測、適切な治療法の選択が可能となり、これからの個別化診療において画像バイオマーカーとして重要な役割を果たすものと期待される。



EOB-MRI肝細胞相低信号肝細胞癌



EOB-MRI肝細胞相高信号肝細胞癌

# 学生課外活動報告

## 西日本医科学生 総合体育大会

第70回西日本医科学生総合体育大会は、代表主管校三重大学の運営のもと、平成30年8月5日から8月20日の16日間にわたって開催されました。今夏は例年よりも気温が高く、過去大会以上に参加選手の熱中症が危惧されておりました。実際、発症者が昨年よりも増加した競技もあったようです。しかし、試合中のウォーターブレイクの回数を増やすといった運営側の配慮などもあり、大事に至ることもなく、また、大きな事故・怪我もなく、無事に大会を終えることができたと思われれます。

今大会における金沢大学の成績は、出場44校中15位でした。

参加した学生の感想としては、「これまでの練習の成果が十分に出せた。本当に頑張った良かった。」というのや、「思ったような結果は出せなかったが、次年度に向けての改善点がたくさん見つかった。」というものなどさまざまでした。

いずれにしても、今大会に向けて仲間と共に直向きに練習に取り組んだこと、大会を通して感じ、学んだことは私たち学生にとってかけがえのない経験になったと思います。このような機会を得られたのも十全同窓会の先生方のご支援あってのことであり、この場をお借りしまして、ご支援いただきました関係者各位に厚く御礼申し上げます。

来年度の主管校は関西医科大学となります。どの部活も、今大会で見つけた課題に取り組み、選手個人々が持てる実力を全て発揮できるよう精一杯頑張っていきたいと思いますので、今後ともご支援のほどよろしくお願い致します。

(主な大会成績)

優勝

男子陸上ハンマー投げ 柳川龍之介

準優勝

柔道部

三位入賞

男子スキー部

女子陸上3000m 山田 はな

四位入賞

男子陸上200m 笹木仁一郎

女子陸上800m 坂東日桜里

女子陸上1500m 山田 はな

女子陸上走高跳 富田 瑞歩

女子水泳400m自由形 竹田 紗帆

女子水泳100mバタフライ 村田美希乃

女子水泳400mリレー

女子水泳400mメドレーリレー

(第70回西日本医科学生総合体育大会  
評議委員 小川 誉元：記)

## 白山診療班

私達白山診療班は、夏山の約40日間を白山室堂にある診療所で、体調を崩された登山客や室堂スタッフのケアをしています。医療行為ができるのは医師に限られていますが、学生は上級生を中心に医療面接を行い、担当医師の助言のもとに処方することを基本活動としています。

ここで、医療行為ができないのなら学生は必要ないのではないかと考える方もいらっしゃるかもしれませんが、実は医師が診療所で夏山全日程をカバーするのは難しい状況です。山の中という閉ざされた環境において万一体調を崩した時、全く相談できる人がいないというのは登山客の方々にとって大変心細いと思います。我々学生が交互に診療所に駐在してすばやく患者さんの状況を知り、医師の指導の下で処方するシステムはとても重要であり、先輩方が代々作り上げてきた大

切な仕組みです。

さて、ご存知の方が多いかもしれませんが、我々医学類生は夏休みが1ヶ月ほどで他学類と比較すると短いものです。なぜその限られた時間の中で3~4日、長い人で2週間も白山に登りたいと思うのでしょうか？

理由は多数ありますが、何と言っても白山の壮大な自然にふれることができるからです。刻一刻と変化する天候のなか歩を進め登頂したときには、なかなか味わい深い達成感を得ることができます。白山は実は火山であり、山中では火口跡に点在する7つの池をめぐる「お池めぐり」ができます。どの池も荘厳な雰囲気醸し出しており、深い碧が神秘的な翠ヶ池をはじめ、万年雪におおわれた千蛇ヶ池の



ほか、道中ではイワギキョウやミヤマキンバイなどの色彩豊かな美しい高山植物も多く見られます。また、御来光を拝することができたときの感動は今でも鮮明に蘇ります。このような自然にふれつつ診療活動ができることは贅沢と言っても過言ではないほどの経験となります。

多くの方々との交流も大切な思い出の一つです。班員と他愛のない話をしながら過したり、一緒に登られた先生より医療手技を学んだり、室堂員さんと共に仕事をし談笑したりすることによって、筆舌に尽くし難い充足感を得ます。このような生身の人間の交流に

よる心的満足感は現代の日常生活では経験し難いものになりました。また、患者さんを問診する際に、「こうすればもっと良かったのに」と自分の未熟さを悔やむこともあり、今後の勉学のモチベーションを上げるきっかけになることもあります。これらの経験は家にもっていても絶対に経験することはできないでしょう。

それでは、簡単に今年の活動を報告させていただきます。今年の夏山で室堂診療所を訪れた患者さんは計113名で、多くは類高山病や関節痛などの運動器症状、外傷が多かったです。要因として、今年の夏山は特に晴れ

の日が多く足元が良い分登山しやすい状況でしたが、足のケアに関して注意が疎かになっていたり水分やエネルギー補給に関して各人の準備が疎かになっていたりしたのではないかと推察します。対策として、診療班は現場での治療だけでなく診療班ホームページやFacebookを活用して予防を呼びかけていきたいと考えています。

最後に、十全同窓会の皆さまより白山診療班の活動のご支援を賜り誠に感謝申し上げます。今後ともご指導のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

(医学類4年 森田 一矢：記)

## 立山診療班

立山連峰は、北アルプス北部に位置する標高3000メートルの天上界で、年間約100万人もの観光客が訪れます。石川県の人口に匹敵するこの数字は、世界一登山者の多い東京・高尾山の登山者の約半分、世界遺産である富士山の4倍程度です。私たち立山診療班は、夏休みの期間を利用し、立山で発生する疾病・事故に対応すべく富山県警山岳警備隊・山小屋・環境省と連携し、無償で診療活動を行っています。合計3つの山岳診療所には、夏休みの1カ月間に、例年100名ほどの患者さんが受診されます。

今年度は学生58名が診療所に入り、診療活動にあたりました。この数は医学類の部活としては最大級です。このように人気がある理由のひとつには、臨床の現場を実際に見てみたい、という我々学生の向学心があると思います。医師の問診・処置を間近に見ることや、医師不在時に学生が対応し、電話で医師に助言を仰ぐといったことは、学生にとって実際の医療との貴重な接点です。また、山小屋での生活も魅力です。太陽のまぶしく照りつける屋根の上に布団を干したり、溢れん

ばかりの星空を眺めながら、小屋の人々・医師・同級生や先輩後輩と送る共同生活は、印象深い思い出です。このように立山診療班は、人に役立ち、自分も成長できる、最高の部活です。

この会報をご覧の診療班卒業生の先生方も、学生時代を思い出しつつ避暑がてらにでも参加していただければ幸いに思います。今年も例年どおり20名ほどの先生方が参加され診療にあたられました。3つの診療所を抱える立山の診療には、もっと多くの先生方が必要だと感じております。また上述いたしましたとおり、我々学生にとって先生方との山小屋生活は貴重です。もしご興味がいまし

たら、立山診療班(kum.tateyama3015@gmail.com)までご連絡ください。卒業後数年経ってからはじめてご連絡をいただき、医師として初参加された先生もいらっしゃると思います。学生の料理と立山の大自然が、いつでも先生をお待ちしております。

最後になりましたが、OB・OGの先生方をはじめ、活動を支援して下さった皆さま、そして本年度も大変貴重なご支援をいただいた十全同窓会の皆さまのお陰をもちまして、本年度の活動も無事に終えることができました。厚く御礼申し上げます。

(医学類5年 西村 和記：記)



## ACLS金沢

ACLS(Advanced Cardiovascular Life Support) 金沢は、BLS(一次救命処置)とACLS(二次救命処置)を中心とした救急蘇生法についての知識や技術を習得するために、学生同士で勉強会を行っております。BLSである心肺蘇生・AEDを用いた除細動・窒息に対する異物除去などの基本的な技術から、気管挿管・除細動などといった高度な治療を用いたACLSまで幅広く活動しています。講義だけでなく、実際に治療に用いる機材を使っての手技練習をするので、より臨床に近い体験ができます。全国の医学部にACLSサークルが存在し、それぞれの大学が開くワークショップ(WS)に参加しています。

WSを通じて私たちは多くのことを学んでいます。それは医学的な内容に留まりません。大勢での議論を時間内にまとめたり、参加者の達成感を高めるためのアイスブレイキングを工夫したり、より効果的に記憶を定着させるためのレクチャーを考えたりしています。パワーポイントに使うフォントから配色、フィードバックに適したホワイトボードの使い方に至るまで、WSでは非常に緻密に計算されています。こうした普段の授業では学べないスキルを全国の仲間と切磋琢磨できるこ



とこそ、このサークルの最大の魅力の一つだと感じています。

今年度も新たに1年生が加わり、去年にも増して活発に活動しています。3月には、福井大学で開催されたALSWS、徳島大学で開催されたALSWS、9月には、愛知医科大学で開催されたALSWS、名古屋市立大学で開催されたFirst-Aid WS、10月には、富山大学で開催されたALSWS、11月には、藤田医科大学で開催された外傷WSと各地で開催されたWSに参加しました。

また、全国規模のコミュニティーだけではなく、金沢大学、富山大学、福井大学の北陸3大学のACLSサークルが定期的集まり、さまざまな内容について議論、発表、実践を

して、互いに刺激しあっています。5月には、金沢大学で北陸新歓BLSWSを開催しました。

その他にも、定期的に学内で勉強会を開き、胸骨圧迫や人工呼吸、気管挿管といった手技の練習をしたり、BLSやALSの根拠を勉強したりしています。また、来る2月には学内でのBLSWSの開催を予定しており、より一層活動に熱心に取り組んでいます。

最後になりましたが、ご指導、ご協力くださるOB/OGの先生方や私たちの活動を支えてくださっている救急部、集中治療部そして十全同窓会の先生方に厚く御礼申し上げます。

(医学類3年 野中 華子：記)

### お知らせ

金沢大学医学部十全同窓会  
会員情報変更サイトを  
ご利用ください

お知らせ 同窓会について 会報 入会案内  連絡先変更はこちら

金沢大学医学部  
十全同窓会

本同窓会の名称、十全とは  
中国時代の数制の二即「首区八十全ヲ以テト為ス」に由来しています。  
本会は金沢大学医学部および医学系研究科の卒業生が単位に情報交換し、親睦を深め、母校の発展を期することを目的とした会です。

LOGIN情報は、事務局より各会員あてに郵送でお知らせしております。  
ご不明な点は事務局までご連絡くださいますようお願い申し上げます。

TEL : 076-265-2132

Email : juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

## 医学展開催御礼

医学展も終わり、寒さがひとしお身にしみることとなりました。同窓会の皆さまにおかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

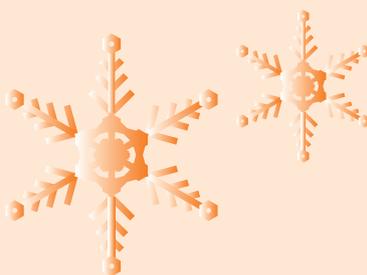
10月27日、28日に開催されました医学展2018は、昨年と同様2日目に金沢マラソンが開催され、また雨が降っていたのにもかかわらず、2日間で3311人の来場者を迎えて大盛況のうちに無事閉幕することができました。同窓会の皆さま方には医学展開催に向けてご支援、ご協力を賜り、学生一同心より御礼申し上げます。

私たち医学生が地域の方々に対してできることは非常に限られております。社会のためにならうと医療者を志したものの、社会に出

るまでは何かを地域に対して成し遂げるのが難しいのが現状です。そうした中で医学展は地域貢献の場であり、地域医療の実践の場であると思うのです。今年も医学展という文化祭を通して盛大に健康の維持と増進を働きかけました。今回の医学展のアンケートを見ると、「一生懸命やっているのが伝わる」、「学生の皆さんとても優しく、子供にも優しく来てよかったと思いました」、「将来の医学会が明るいと感じた」等のご意見をうかがうことができたことから、医学展は地域の方々に大きな意味を持つとあらためて感じました。今年のテーマ「line」には地域の方々や医学生が、また、一見無関係だと理解していた医学的知識同士が、そして今の健康と未来の健康が「line(線)」でつながるようにと願いを込めました。当日はご来場されたお客さまには大変満足していただき、学生一同力を合わせ皆で医学展2018を作り上げることができたと自負しております。

今振り返ってみても今年の医学展は地域の方々や難解でとっつきにくいと思われがちな医学の世界に興味を持つきっかけを提供できる場でありましたし、未熟で医学的知識が完璧ではない私たち学生が普段は受け身で学んでいる医学を発信する側に立つことで理解を深め、自分自身の学習姿勢を見つめ直すことのできた機会でもありました。医学展を通じて多くを学べ、このような貴重な体験ができたのは同窓会の皆さまをはじめとするたくさんの方のご支援、ご協力のおかげです。またご支援くださった皆さま、医学展に協賛・協力してくださった地元企業、団体の皆さま、そして当日足を運んでくださったお客さまには改めて感謝の意を表したいと思います。医学展は先輩から後輩へと受け継がれていきます。来年度医学展のさらなる発展を祈るとともに、今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

(医学展2018実行委員長 白石 裕紀：記)



# 十全昔話

## 卒後50年の回想

### 久保田紀彦

(昭和43年卒業)

平成30年は我々43卒にとって記念すべき卒後50周年である。6月16日には7年間も開催されなかった同級会を開催することができた。過去を回想する好機だと思い50年間で振り返ってみた。

昭和37年からの6年間の学生時代でもっとも印象に残る思い出は3年生から6年生の小立野での医学部授業である。当時は日本・世界に誇る教授が多数おられ、すぐれた教育を享受できた。

組織学の本陣教授は組織実習前に理路整然と実習内容を講義され、実習中も丁寧に顕微鏡所見を教えてくださいました。とくに電顕は当時の最先端の学問で、学生にも電顕写真をスケッチさせた。この作業は難儀で長時間を費やし投げ出したくなった。その後、電顕が私のライフワークになろうとは想像外であった。

肉眼解剖学の山田教授は、静かな口調で講義され、実習は深夜に及んだ。先生の言動には「勉強しないものは医者になるな」という鋭い響きがあった。先生の影響で頭蓋底・頸部の解剖に興味を湧き、私の進路を決定づけた。この実習の時に東京オリンピックが開催されており、一部の同級生は実習をサボってマラソンのテレビ中継を観戦していた。この事実で酒井助教授は激怒し、反発した者が実習停止を命じられたことがあった。

生理学の大村教授はResting potential, Action potentialの話の冒頭でお経のように何回も言われ、反復するうちに自然と覚えさせられた。猫の除脳硬直実験では脳幹と脳を切り離すことで猫の四肢がつっぱった状態になり、意識も無くなる。

齋藤教授のウサギの自律神経刺激実験では、迷走神経を刺激すると腸が動き、脈拍が遅くなる現象を今でも思い出す。動物実験は一度実習すると生涯忘れぬ程印象に残るものである。

生化学の久野教授の講義は難解な分子科学

を大変明快に解説され、聞いているだけでほとんど理解できた。

病理学では梶川教授の講義が大変ユニークで言語明瞭・理路整然としており解りやすかった。先生は膠原病では日本をリードされており、先生の著書「膠原病の概念」は何度も読んだ。先生のCPCは病理と臨床所見を結ぶ謎解きの講義で、いつも教室には聴講生の立ち見ができた。先生には大変ご縁があり、私の博士論文「髄膜腫細胞の細胞間物質形成能」の電顕観察の指導者で、電顕写真を持参して、直接ご指導いただいた。また先生は後に福井医科大学学長になられ、私が同大学に転勤した際もお世話になった。

臨床系教授も大変講義の上手な先生が多数おられた。とくに武内教授と村上教授の内科の講義は優れていた。泌尿器科の黒田教授、皮膚科の福代教授の講義も明快であった。ポリクリでは直接まちかどで患者さんの所見を観察できた。精神科の大塚教授には詳細な神経所見(Argyll Robertson瞳孔)を見せていただき、現在も忘れない。

我々の学年はインターン制度が昭和42年で廃止され、研修登録医制度を始めることが厚生省から発案された最初の学年である。数年前よりインターン制度廃止運動が燎原の火の如くに日本中に拡がり、昭和42年度にはついに全国で国家試験ボイコットが遂行された。我々のクラスも登録医制度の導入に反対し、昭和43年2月に2科目の卒業試験ボイコットを実行した。また、臨床系大学院受験もボイコットした。幸い2科目の再試験を3月中に受験できたので全員無事に3月31日に卒業でき、皆綱渡りの人生を体験した。

私は自ら望んだわけでもないのに「研修医制度検討委員会の委員長」を3年間も務めることになった。現十全同窓会長の中村信一君は同級生で研修委員であり、卒業試験を2科目残す直前に私に「今卒試ボイコットをしな



ければもうする機会はないぞ」と強く進言した。私もこの時今までのモヤモヤした考えが晴れ、クラスの皆に卒試ボイコットを呼びかけた。主義主張はさまざまであったろうが、クラス全員が賛成し敢行した。中村君の慧眼でこのクラス方向性が決定されたことは生涯忘れられない。これはインターン制度反対運動の流れの中で我々も研修制度改革に真剣に取り組んだ結果であると回想している。

幸いこの年の5月に医師国家試験を受験できた。医師免許が後の自主研修の支えになり、医療行為を正式に行うことができた。金沢に残った60数人と他大学の卒業生数人を交えて、我々が独自に作成した研修スケジュールを1年間実行できた。研修先は大学病院と北陸三県の中小病院に2~6カ月間隔の研修であった。

私はまず大学の放射線科で2カ月、主に胸部レ線写真、造影胃腸透視レ線写真を教えていただいた。これは診療の基本でありその後の診療に大変役に立った。6月からの2カ月、福井県の今立中央病院内科に赴き、不慣れな外来診療であったが沢山の患者さんを診療した。胃透視検査の実習後に私が検査することを依頼され、何人かの胃透視検査をした。放射線科で毎日のように胃透視レ線写真の勉強をしたことが大変役にたった。この病院は町の唯一の産婦人科医が院長先生であり、分娩を見学する良い機会であった。胎児の頭までは何回も観たが、30分ほど待っていても少しも進行せず、その場を離れて仕事をしていると、もう分娩がすみましたとの報告があり、何度も同じことを繰り返したので、一生に一度も経産分娩を観察できなかった。一方、大学では帝王切開を数度見学した。私の医療行為を振り返ると、現在の研修医制度における2カ月の必須産婦人科研修をする必要性を感じない。

8月からの2カ月間は、犀川沿いの石野病

院に勤務した。この病院は金沢の繁華街の香林坊や片町の近くで、とくに夜間の急患が多く救急患者の対応を覚えた最初の病院であった。夜間にやぐざ紛いの患者の喧嘩による外傷例が絶えなかった。そのお蔭で色々な人間との対応を身につけることができた。当時は交通事故による鞭打ち症患者があふれていた。また、当時に多かった虫垂炎の手術を30例程執刀させてもらった。院長先生は積極的で、多くの外科手術に挑戦しており、急性硬膜下血腫の緊急手術の助手をしたことが目に浮かぶ。

10月から1月までの4カ月は大学の村上内科にお世話になった。私が担当した慢性腎臓疾患のSIADHを医局会で大きな黒板一面に臨床経過を書いて発表した。村上教授は大変に教育熱心であった。発表後に誰もいなくなった時、村上教授だけが残って私の黒板に書いた間違いスペルを5カ所程指摘された。これで終わりかと思ったら、お前の症例に関する文献を読んでおくと10篇以上を紹介された。教授はたかが研修生の発表前に驚くほど予習されておられたことに驚嘆した。その後の人生で私も含めてここまで予習されている教授を知らない。この時に受け持った妙齢の患者さんが別れる時に涙を流して握手された姿が目に残っている。医者冥利につきた初の体験であった。

2月から3月には皮膚科で福代教授の外来診察を見学した。皮膚疾患は視診がきわめて大切で、教授は困難な皮膚病を次々と確実に診断されていた。この際、いくつかの教科書を横において丁寧に解説された。大変興味が湧き、皮膚科に入ろうかと思ったほどであった。この教室には形成外科の塚田助教授(後に金沢医大教授)がおられ、ユニークな講義もしていただいた。その後、福代教授には偶然に先生の90歳記念パーティでお会いした。その時私の顔を見て「お、久保田君元気か？」

と言われたのには驚いた。たった2カ月の研修生を覚えておられた頭の冴えに驚嘆した。

昭和44年4月より山本信二郎教授のもとで「脳神経外科」を学んだ。当時は3Kの代表的な診療科であったが、テレビドラマ「ベン・ケーシー」の人気もあり、脳神経外科に憧れる若者も多かった。しかし、診断・治療に困難を極め惨憺たる結果であることが多かった。診断が飛躍的に良くなったのは昭和51年のCTスキャンの導入で、その年には9人(卒業生の10%位)の入局者があった。

また、このころ手術顕微鏡が導入され細かい脳組織でも仔細に観察でき、手術結果が飛躍的に改善された。さらに昭和60年のMRIの導入は詳細な脳組織の観察に加え、脳の機能的観察が可能となり、病態解明に大きな役割を遂げた。また、SPECTやPETの導入が病態解明に拍車をかけた。最近術中CTやMR画像で手術の精度が向上している。脳外科疾患は(1)内視鏡手術(2)血管内手術(3)定位放射線治療で治療成績が向上した。

私が最も学問向上に役立ったことは「海外留学」であった。この機会に私が取り組んでいた脳腫瘍、特に髄膜腫の電子顕微鏡的観察がモンテフィオーレ病院(アインシュタイン医科大学)の平野朝雄先生のご指導で世界的なワークとして成就できたことである。また、時々脳外科手術も見学した。さらにパリとロンドンで世界的権威者の手術も数多く見学し、日本の臨床は30年位遅れていることを実感した。外国人の思想や日常生活に接し、このように進歩した国を相手に戦争した先人の先見のなさに落胆した。

最近日本の医師の海外留学者が激減していると聞く。アジア諸国の医師は積極的に海外留学をしている。金沢大学の若い医師もぜひとも海外で学び、欧文論文作成に精進されることを切望する。

# 学生コーナー

医学類 4年

## 林田 珠奈

十全同窓会の皆さま、明けましておめでとうございます。医学類4年の林田珠奈と申します。私は金沢大学に入学してもうすぐ4年が経とうとしています。基礎医学・社会医学・臨床医学の系統講義が終わり、今は来る試験のための勉強に精を出す日々を送っています。今回学生コーナーの執筆の機会をいただくにあたり、学生生活で感じたことを自分が体験に絡めながらお話ししたいと思います。拙い文章ですが、目を通していただくと幸いです。

基礎医学は人体の構造や機能、またそれに基づいた疾患についての学問です。人間の体について勉強するにつれて、その仕組みの精巧さに驚きました。私が特に興味を持ったのは神経生理学です。事故で脳を損傷しただけでその人の性格が全くの別人ようになってしまったという話を聞き、衝撃を受けました。というのも、個人の性格というのは笑ったり泣いたり長い年月をかけて形作られてゆく唯一無二の財産だと思っていたからです。それがそんなに簡単に失われてしまうものなのかと唖然としました。これがきっかけで脳の神秘さに特に興味をもち、MRTプログラムで神経生理学(旧第二生理学)の研究室にお世話になることになりました。MRTプログラムというのは、学生の頃から自分で基礎研究をやってみようというプログラムです。大学入学時は生物と言えば中学生の理科Ⅱまでの知識しかなく、研究はインテリ集団しかできないもの、論文は世紀の大発見ばかり書いてあるものと思っていました。なので、いざ論文を読んでも「めっちゃ長い論文を頑張って読んだのにオチはこれだけ？」なんて思うこともありました。しかしMRTを通して、基本的な手技から高度な実験計画まで手取り足取り教えていただき、失敗をたくさんしながらも基礎研究の奥深さを肌で感じる事ができました。当たり前のように教科書に載ることも、たくさんの試行錯誤が詰まった小さな発見の繰り返しの結晶だと分かり、結果を出すことの難しさを感じるるとともに、脳の機能がとても緻密な歯車の連続であることも分か

りました。さらに脳にはまだ謎が多くあることも分かり、その未知のものを解明するのは面白いと思いました。とは言っても、今は勉強が忙しく、研究室は私の第二の家と化しているのですが、そんな私にも優しく接してください

先生やスタッフの方のあたたかさや冬の金沢と試験によって凍てついた私の心は溶かされています。試験後にもう一度本腰を入れて実験したいと考えています。

さらに社会医学で社会的な環境と健康について学びました。もともと社会医学に興味をもったことが私の医学部に入るきっかけになったのですが、大学ではその社会医学の難しさを感じました。3年次にスイスのジュネーブのWHO本部に1週間ほど研修に行かせていただきました。そこでは世界中の選りすぐりのエリートたちが全世界の医療の根本となる仕事をされていました。お話を聞き、全員が健康になるような医療制度をつくる難しさを感じました。私は自分の学年の試験日程を決める役割を頂戴しており、①学生側の意見をまとめて、②先生方や教室の予定を見つづ日程を考えて、③先生方や学務の方に交渉やお願いをするということをしています。たった1学年120人の意見ですら一致せず、また多方面と交渉する難しさにも悩むこともあったので、WHOのように顔が見えない何億もの考え方が違う人間を相手に仕事や交渉を進めるといことはとても難しいと感じました。さらに結果がすぐには出ないものや客観的なデータにしばらくの間も中、投資のことも考えつつ未来を予測しなくてはならないという難しさもあります。ましてや、国全体の規模の利益まで考えて行動しなければいけないことも多いのだらうなと思いました。

そんな中、3年次の冬からついに臨床医学が始まりました。何を見ても知らないことだらけで、これは勉強しなくてはと思い、いざ勉強を始めると、その病態や知識の広さと深さに驚きを隠せませんでした。苦勞して覚えたことが1週間できれいさっぱり忘れてしまう自分にうんざりすると同時に、先生や先輩方もこのような辛さを乗り越えてプロフェッショナルになられたのかなと親近感を覚え、改めて尊敬の念を抱きました。



ジュネーブWHO研修にて

私はこのような学生生活を通して多くの優秀な先輩や友達ができ誇らしいと感じる反面、自分がみじめに思えたり、講義で流れる医療ドラマの1シーンだけでも涙があふれて悲しい気持ちになってしまったりします。こんな調子であと数年後に本当に医者になれるのだろうかと不安に思うのですが、それでも、一つだけ自慢があります。それは私を導き、多くのことを教えてくれるまわりの人に恵まれているということです。私には目標になるような人がたくさんいるのですが、それは部活動でも同じことが言えます。私は予想していなかった硬式庭球部に入るようになったのですが、そこではさまざまな考えをもち刺激をいただける先輩や優しい後輩に恵まれ、信頼できる同期と苦難を乗り越えることができました。これまでの学生生活のうち泣いたり笑ったり悩んだりしたことの多くは部活に関係することで、その体験は間違いなく自分にとってかけがえのない財産になったと思います。

今の段階では将来についても何も決まっていなくて焦りや不安もあります。ですが、思えばこの大学に入ること自体も、学生生活も、自分が予想していなかったことばかりでした。それでも私のまわりにはいつも素敵な人との出会いであふれていて、その予期せぬ偶然の一つひとつですら何か意味のあるものに思えて仕方ないのです。今までの素晴らしい出会いに心から感謝すると同時に、これから先にもきっと素敵な出会いがあって、何か刺激的なことが待っていると信じてみようと思います。まわりの人の支えがあってこそ私ですが、勉強ばかりは他人まかせとはいかないようです。今は自分と向き合い、そしていつか自分がまわりを支え、医者として患者さんに寄り添うようになりたいと思います。最後に、貴重な執筆の機会をいただいたことに感謝して結びといたします。

## 第12回金沢大学 ホームカミングデイ開催

平成30年10月27日(土)、本学角間キャンパスにおいて、第12回金沢大学ホームカミングデイを開催しました。歓迎式典には208名、懇親交流会には189名の卒業生およびそのご家族等にご出席いただき、大変盛況で賑やかな1日になりました。

歓迎式典では、最初に、本学合唱団および出席者全員で校歌を斉唱しました。続いて、山崎光悦(やまざき こうえつ)学長の歓迎挨拶、山出保(やまで たもつ)金沢大学学友会会長の祝辞の後、大竹茂樹(おおたけ しげき)理事・副学長から金沢大学の近況が報告されました。最後は、現役学生の現状について、学生の留学体験報告(2名)を実施し、出席者からは好評をいただきました。

特別講演では、「金沢と私、そして研究」と題し、東北大学電気通信研究機構特任教授で本学理事(産学連携・高等教育改革担当)中沢正隆(なかざわ まさたか)氏(昭和50年工学部卒業)に、ご講演いただきました。

歓迎式典終了後には、金沢大学学友会 第8回役員総会が開催され、役員の一部交代の報告がありました。

夕刻からの懇親交流会は、山出保学友会会長の発声の乾杯で始まりました。会場では、本学フィル(弦楽)により、開始前と乾杯後に演奏をしていただき、懇親交流会を盛り上げていただきました。その後、恒例の揃いの法被に身を包んだ卒業生有志による「金沢大学

校歌」、「北の都」、「南下軍の歌」の高唱があり、会は大いに盛り上がりました。

また、午前中にキャンパス見学会(4コース：63名)を実施しました。

次回、第13回金沢大学ホームカミングデイは、2019年10月26日(土)に開催が決まりましたので、校歌を歌いに、懐かしい母校にぜひお越しください。

(学友支援室長 村田 記：記)



歓迎式典で校歌を歌う出席者

# Canon

## 新しいステージへ。

### キヤノンメディカルシステムズが始動します。

2018年1月、東芝メディカルシステムズは、「キヤノンメディカルシステムズ」に社名を変更し、キヤノングループの一員として、新たなスタートを切りました。これからも、「Made for Life」の経営スローガンにもとづき、世界の医療に貢献してまいります。

患者さんのために、あなたのために、  
そして、ともに歩むために。



キヤノンメディカルシステムズ株式会社 <https://jp.medical.canon>

Made For life

臨床研修医の必修事項を完全収載！  
実績ある救急・応急診療マニュアルの決定版！！

# 当直医 マニュアル

2019  
第22版

井上賀元 編集代表

Manual for Resident since 1988

## 主な改訂

- 今回より、つぶやきの欄を新設し、著者からのメッセージを掲載。エビデンスや教科書的な記載を超えた先人の知恵が学べる。
- 新規項目の紹介；第13章「透析患者への対応」、第1章「最近話題の感染症2019」には梅毒・風疹・麻疹を記載。  
また、近年増える一方の高齢終末期患者への対応の考え方についてもコラムでまとめた。
- あらたな取り組みとして、目次および索引で関連する箇所については、項目名と参照ページを併記。「今知りたい」記載を「すぐに」探せる構成。

A6判変／960頁 定価（本体 5,000円＋税）  
ISBN978-4-263-73443-8

## 主な目次

- 第1章 当直医のために
- 第2章 救命救急処置
- 第3章 多臓器系統の鑑別を要する症候
- 第4章 内科
- 第5章 小児疾患
- 第6章 外傷・外科・整形外科疾患
- 第7章 精神疾患
- 第8章 泌尿器疾患
- 第9章 女性疾患
- 第10章 眼疾患
- 第11章 耳鼻咽喉疾患
- 第12章 皮膚疾患
- 第13章 当直医に必要な資料



現場の知恵として  
つぶやき欄を新設！

医歯薬出版株式会社  
〒113-8612 東京都文京区本駒込 1-7-10  
TEL.03-5395-7610 FAX.03-5395-7611  
<https://www.ishiyaku.co.jp/>





© Cultura RM Exclusive / Edwin Jimenez / Getty Images

## Empowering Life

サノフィは、ヘルスジャーニー・パートナーとして、  
私たちを必要とする人々に寄り添い支えます。

**サノフィ株式会社**

〒163-1488 東京都新宿区西新宿三丁目 20 番 2 号 東京オペラシティタワー [www.sanofi.co.jp](http://www.sanofi.co.jp)



# 科学するヤクルト

ヤクルト中央研究所  
(東京都国立市)

ヤクルトには「科学するひと」がいます。多くの研究者が、日夜、世界の人々の健康を願い、研究開発に力を注いでいます。  
乳酸菌にできることはもっともっとあるはず。私たちはそう信じて、今日もここヤクルト中央研究所で、  
すこやかな未来のために一人ひとりがミクロの世界を科学し続けています。



人も地球も健康に

**Yakult**

株式会社ヤクルト本社 <https://www.yakult.co.jp>

すべての革新は患者さんのために

**CHUGAI 中外製薬**

Roche A member of the Roche group

**at the Front Line**  
CHUGAI ONCOLOGY

**AVASTIN®**  
bevacizumab

日本標準商品分類番号 874291

抗悪性腫瘍剤 抗VEGF<sup>注1)</sup>ヒト化モノクローナル抗体  
生物由来製品、副薬、処方箋医薬品<sup>注2)</sup>

薬価基準収載

**アバスタチン®** 点滴静注用 **100mg/4mL**  
**400mg/16mL**

AVASTIN®  
bevacizumab

ベバシズマブ(遺伝子組換え) 注

注1) VEGF: Vascular Endothelial Growth Factor (血管内皮増殖因子)  
注2) 注意-医師等の処方箋により使用すること

製造販売元 (資料請求先)  
**中外製薬株式会社**  
〒103-8324 東京都中央区日本橋室町2-1-1  
ホームページで中外製薬の企業・製品情報をご覧ください。  
<https://www.chugai-pharm.co.jp/>

2018年9月作成

※効能・効果、用法・用量、警告、禁忌を含む使用上の注意、効能・効果に関連する使用上の注意、用法・用量に関する使用上の注意等は製品添付文書をご参照ください。

**ホテル日航金沢**

城下町・金沢を彩る”舞台”という発想のホテルです。  
地上30階、高さ130mは北陸随一のスケールを誇り、多彩で充実した施設と  
きめ細やかなおもてなしで皆様をお迎えいたします。

一期一(縁)のおもてなし。

一期一(縁)のおもてなし。

**ホテル日航金沢**  
hotel nikko kanazawa

〒920-0853 石川県金沢市本町2-15-1 (JR金沢駅兼六園口前)  
Tel:076-234-1111 Fax:076-234-8802

ホテル日航金沢 検索 [www.hnkanazawa.jp](http://www.hnkanazawa.jp)



# がんを負けない 希望をつくれ。

人がしないことに、挑戦する製薬会社。

nihon  
medi+physics

## 明日の幸せを願い、 「診る」そして「治す」核医学。

私たちは、がんや心臓病、脳血管疾患および認知症などの  
早期発見に役立つSPECT・PET検査用放射性医薬品や、  
がん治療用の医療機器、疼痛緩和に有効な治療薬などの  
創出を通じ、これからも皆様の健康に貢献します。

for the happiness

〒136-0075 東京都江東区新砂3丁目4番10号 TEL (03) 5634-7006 (代)  
<http://www.nmp.co.jp/>

 日本メジフィジックス株式会社

2018年8月作成

# 会報編集委員の紹介

## 学内編集委員(14名)

太田 哲生  
蒲田 敏文  
中村 裕之  
横山 茂(副編集委員長)  
絹谷 清剛(編集委員長)  
篁 俊成  
和田 隆志  
佐々木素子  
谷口 巧  
山本 靖彦  
中田 光俊  
倉知 慎  
毎田 佳子  
濱口 儒人

## 学外編集委員(20名)

山口 成良  
津川 龍三  
赤祖父一知  
佐藤 保  
三輪 晃一  
橋本 琢磨  
中村 信一  
勝田 省吾  
山本 健  
山本 博  
山岸 正和  
大村 健二  
横山 仁  
大島 徹  
横山 修  
中本 安成  
常山 幸一  
古川 健治  
若山 友彦  
中西 清香

以上34名で構成されています。  
土屋弘行十全同窓会理事長には、  
編集委員会にご参加いただいております。



表紙の写真

## 医学類旧書庫

1926(大正15)年に竣工した医学類旧書庫は、医学類教育棟、E棟、F棟、G棟にぐるりと囲まれた中庭にあります。古い教材や法医学資料等を保管しています。

題字：中村 信一(十全同窓会会長)

発行：金沢大学医学部十全同窓会  
会報編集委員会  
〒920-8640 金沢市宝町13-1  
<http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp>

発行日：平成31年1月17日

印刷：能登印刷株式会社

## 会費納入のお願い

今年度より同窓会費を1月号に併せて徴収させていただくこととなりました。十全医学会とは別組織であることをご理解ください。名簿改訂は5年毎に変更となりました。次回改訂版(2020年)は、従来と同様に会費納入者へお届けいたします。

## 編集後記

新年あけましておめでとうございます。「平成」もいよいよ終わりを迎え、平成31年5月1日の皇太子さまの新天皇即位に伴う改元により以後は新元号となります。金沢大学医学部(系・類)は、彦三種痘所の開設から数え「文久」「元治」「慶応」「明治」「大正」「昭和」「平成」と7つの時代を、金沢大学医学部十全同窓会会報は昭和25年に創刊ですので2つの時代を駆け抜け、そして、次の「新元号」の時代へ向かうこととなります。私自身も、3つの時代を生きることになりそうで、感慨深いものがあります。これまでの歴史を重んじ、次世代に引き継ぎ繋ぐ、そして、時代を超える新しいものを取り入れ発展させていく。そこには先を見据えた改革が必要になってくるのかもしれません。

同窓会という団体のあり方を考えてみましても、「親睦会」や

「後援会」的な要素を核とし、母校の発展を期する組織であることが求められると思います。宿泊施設やレストランを備え持つ同窓会や、地区同窓会の枠組みを超えた横の交流を行い、そして大学の枠組みも超えた連携を行う同窓会も存在しているようです。「同窓会のあり方検討委員会」を設置して、方向性を協議している大学もあるようです。母校に対して強い影響力を持つようなものもあるようですが、十全同窓会は今後どのような同窓会組織として存在すべきなのかを考える時なのかもしれません。

同窓会会員の皆さま方におかれましては、希望に満ちた明るい新時代を迎えられますよう心よりお祈り申し上げます。

(山本 靖彦：記)